

麻 生 路 郎 主 宰

III 柳 雜 誌



三
月
號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和八年三月一日發行（每月一圓一日發行）

第十卷 第三號

川柳雜誌社發行

開店一週年記念

感謝デー

エロ派來たる
べからず
鯨飲派來たる
べし

(キング讀本より)

▲川柳名句福引

開店一週年を自祝して
三月廿七・廿八・廿九日の三日間
福引お笑種を差上げます
是非々々お立寄下さい!



南海本線玉出本通三(十五間道路北の辻西)

喫茶
洋酒

キング喫茶室

電話天下茶屋二五七九番

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全



川柳雜誌 第十卷第三號 目次

頭字 麻生路郎 表紙繪 小寺鳩甫

川柳の翻譯に就て

笠原路生 (九)

武玉川初篇研究 (三)

梅本秋豊 (三)

三笠附に據る流人 (下)

藤里好古 (三八)

肱枕艸紙 (三)

梅本塵山 (三)

僕のねこソロ

太田隆彦 (四)

斷章

松丘町二 (五)

武玉川初篇研究疑義二三

寺川信 (六)

木村晃卓君を悼む

石曾根民郎 (四)

千日前今昔史 (六)

河野夜王 (四)

句を味ふ

木村半文錢 (四)

飛燕往來

琴人杏三・二南 (五)

十二月の夢

諸家 (八)

街に住めば

關本雅幽 (三)

高橋かはる (四)



松竹座

中西おさむ(三五)

冬至は荒れる

中島鐵洲(三六)

初冬の夜を彷徨ふ

藤野華村(三七)

川柳塔

(四〇)

閑生、水車、二南、新水、町二、艸榮、綠雨、亂耽、雅幽、柳路、明珠
夕鐘、春秋、小柳子、變人、鮎美、日本村、八步、紅、靜太、民郎、お
さむ、華水、美夜路、翠夢、司郎、沒食子、天痴人、綠之助、英賀夫、
禿山、紀太、竹櫛

粒々集

(三八)

五健、柳秀、久流美、路生

近作柳樽

麻生路郎選(三八)

光耀抄

麻生霞乃選(三九)

一路集

(四二)

責任 橋本綠雨選 街頭 松丘町二選

玩具 吉田水車共選 上野錦水

各地柳壇

(四四)

西之町MEMO.....綠雨(四二) 編輯の窓.....町二(三七)



川柳塔

…選郎路…

阿部閑生

今日だけを罵る酒で寝て了ひ
火だこの手霜焼けの手を近寄せす
髯剃りに血のにじむ日は人事凶
地下室へ並んで下りる邂逅ひ
盃に靈ある如し二人酌む
何の肉食はされてゐるかも知れず
飴ふくむ女出てきて留守といふ
調剤を待つてゐる自分だけとなり

吉田水車

さうさうは生んでくれない鶏を飼ひ
アパートは病院染みて物を干し

何か降る氣配今宵を丸く寝る
佛壇へ向いても無我になれぬ僕
犬でさへ俺に見切りをつけて去に
えらうても水入らずでと思ふ母
はしたなく坐るマダムの編み續け
夜更しも無事ながうれし親心

楊井二南

春の膳親子五人を羨まれ
正月の世辭松の値も聞いて置き
炭白くなるまで愚痴を聞いてやり
立聞きの許して置けぬ影になり
まるきこゝろ煙輪になる面白さ
古本屋少女は菊池寛を撰り

朝田新水

煙突屋今來た道を考へる
靈柩車あまりに晴れた晝はてれ
片意地の飯だけ三度食うてゐる
後添へ子供心の玩具見せ
名刺見てお流れ頂戴すると決め
浪人となつて床屋で議論する

松丘町二

空や冬地や冬あらず我が心
小蒸汽がタイブライトうつ霧の中

ひと冬を怠り生きて本の塵
日を吸つたので日が匂ふ子の頬つべた
ふつと笑へば笑ひ返して夫婦きり
倒れた馬にみつめられてる空

西田 艸 樂

更生だ梅も櫻も咲かば咲け
蓋とればお粥の泡が慌てたり
東郷と乃木とを香具師が違へてる
ノートブックこんな事教へて師は逝けり
商人になりきれぬ男 辭書が要り

橋本 綠 雨

木の葉が落ちて派出所寒う立ち

勤務中

炭船が道頓堀を逆のぼる
手仕事にあられの音と靴の音
唇の厚い男に火がはいこり
冬の海汽船が一つ見えるのみ

住田 亂 耽

牛肉に操縦されてゐる夫
盃のうしろに俗務堆高し

神戸のある旗亭にて(二回)

足利の世を思はせる顔も来る
奇才縦横に酌婦の社會學

Yといふ男
忠告の返事に多謝と書きしのみ

關本 雅 幽

子無き家の節分

豆撒いて淋しき笑ひ拾ひたり
たゞ笑ふ男となつてあぶらざり
住めば都のすゞめよござれて
話つけてしまへ算盤貸してやる

岩崎 柳 路

その當座お花畑の夢を見る
鍵穴を覗けばドレスちらと見え
係官逃げられた譯へ苦笑する

○
西村 明 珠

長持ちや箆笄娘を他人にし
紙芝居おのが住居を遠ざかり
洗ひ髪してまん圓い顔で會ひ
襖から襖へ傳ふ子もうれし
忠義ぶる男の顔がほてるなり
辛棒をするんですげと羽織着せ
ふとんとぢく嫁の愚痴など云つてゐた
餘念なく歩く心で暮さうよ

一等米二等米など云ふとれず
姫田 夕 鐘

師の講演

先生の話が向をかへさせる
つき出しの豆ちらばつた三下り
あてがうてくれた舞子と狭う寝る
手をつかへ損の行かない世辭となり
盃洗で飲まされ財布預かられ
馬鹿になりや馬鹿な女給が笑ふなり

喜多春秋

女給の子晝までの母夜の母
泣かさずにいれる女湯よくしやべり
うちあける姿になつた女の手
買へ買へと雑誌廣告一頁
今は昔高田の馬場の喫茶店
銀狐三浦環を開く夕べ

松下小柳子

マスクをかけた親子が通る戎橋
母は子の頭を語りて父は留守
敗軍の様に降りくるぼたん雪
朝霧の河岸を小さく女行く
無理もない朝寝なりけり君の夢
訝へた月貧しき者に似し二月
故郷へ戻つて爪がのびてゐる

妹尾變人

死ぬ様な氣がするなど、空を見る
父と母話してお茶がすぎになり

温泉にて

親切な人ばかりが病んでゐる

歸國

手土産が母を泣かせる事になり

水谷鮎美

異議を唱へる眼鏡が青い

唐辛子一つつまんで酒の味

大菩薩峠を觀る(三句)

笛吹へて見ゆる心に劍あり

無明の闇に人相書は廻るなり

手拭をくわへ七兵衛の早走り

岩垣日本村

寒行の鼻の赤さを笑へない

小便の臭ひに村は暮れるなり

涙ふけば次の相手が出来るなり

大西八歩

松過ぎの風もつれなくなつてくる

鳴り止んだところで儲ける羅字仕替

僅少なお金の前に強くなる

熊谷紅石

友達の氣を僻ませて辻を折れ

又しても洋装で居た坐り癖
嘘を云ふより外に手がない失策

石森 靜太

ほそきてくびをシャツでかくさう
ふとみればきみのひとみがぼくにある

病床 吟

自殺とは父母も殺さむことなるか

石曾 根民郎

フエリシタ夫人の愛兒へ

國際の戀の坐礁に息づく腫

聯盟小國側へ

花吹雪しばし埋れて寝てよかし
鳴かぬなら殺せと云うた社會相

中西 おさむ

女からまた嘘を聞く今宵なり

銀行へ女要心深く來る

ハンドバッグの中に貞操觀念はありません

日野 華水

御無沙汰を詫びねばならぬ膝頭

子澤山算盤がない尺がない

巧いこと嘘が出て來る年になり

憧憬の都へ行つて孕まされ
機密費と云うて社の金使はれる
八木 美夜路

死んで呉れと云ふ言葉をば聞きかへし
安らけく痴人と云はれ死ぬもよし
生田 翠夢

平岩 司郎

握手して歸つて來たにわすれもの
生きてゐる足かと見つめ自信なく

押賣が隣にゐるしめときな
化粧して春の埃りへ躍り出る

みな一升飲める仲仕の焚く藁火
特高課ピラを撒かぬを不穩がり

廣江 天痴人

閑人に笑はれさうな議會にて
軍國の春長男のまだ小さし

尼 綠之助

身の程は知らずともかく銀狐
變つたはみんながいける口になり

荒井 英賀夫

上 販して

奥野 禿山

詳しくは考へ置くの一手也
陽氣の昇るところ 社長不在なり

首藤 竹楓

約束を約束らしく云ふをんな
ピンポンの玉の弾みにゐる若さ

春元 紀太

城崎にて

人間の價値をどてらで包み込み

粒々集

―路郎選―

松山 前田 五健

昭和八年二月六日午前二時四十分、子規の寺（正宗寺）全
焼……職務のお蔭で警戒線を突破し、子規、鳴雪二俳聖
の墓前に、せめて土足に汚さるゝを防ぐんと提灯を高く
掲げて起つ。

燃へ盛る炎

焰高し子規鳴雪の揺る顔

子規堂灰燼

大紅蓮史跡の最期拜まるゝ

焼跡

影何所にたのもののホ句の内玄關

御影 長崎 柳秀

酔ひさます爲の欄に寄りそはれ
勤めてる嬉しさ今朝も途で逢ひ
日本で飲んで居るとは思へぬ
春の夜に婀娜めく影も濱の茶屋
囁けば女給元よりうなづきぬ
露次を出る下駄は眞冬の音を立て

金澤 安川 久流美

愚陀君を悼む

ぐだぐだを言はずはちすの花を戀ひ

京都 笠原 路生

ピカソの繪かゝる世界もありてよし
蟹や蟹其反抗が何になる
ペルシヤ猫娼婦の如くより來たる
犬の目を見つめてゐれば淋しいぞ
人生を甘くみすぎた顛落だ



川柳の翻譯に就て

笠 原 路 生

小説詩歌の翻譯は時としては創作以上に至難であると云はれる。日本の詩歌の外國語に翻譯されたのを讀むにどうも原作の味ひに乏しいことは誰れでも感ずるところである。殊に俳句とか川柳のやうな短詩形のは其翻譯によつて原作の味ひなり、趣きなりを髣髴せしむることは殆んど不可能と云ふて差支へはない。俳句に就て今その例を擧げて見る。

釣鐘にとまりて 眠る 胡蝶かな 燕 村
右の句の英譯に就て Dr. Curtis Page は次の様に翻譯してゐる。

The butterfly sleeps well
Perched upon the temple bell.....

Until it rings!

同じ句を最近出版された宮森麻太郎氏の
Hai n Ancient and Modern 1246

Upon the temple bell.

A butterfly is sleeping well.

と譯されてゐる。宮森氏はページ氏の譯し方は原句を全く理解しないのみならず、原句のもつ味ひを破壊した譯し方であつて Until it rings 「.....鐘がなる迄は」は全く蛇足であると云つてゐる。私も宮森氏の説には全く同感であるが、釣鐘とか、胡蝶とか云ふ言葉のもつ傳統的の味ひなり、趣きなりに何等の豫備的知識のない外國人に宮森氏が試みられた様な原句の直譯的翻譯によつて果して原句のもつ味ひが了解されるかどうかと云ふ點に疑問をもつてゐる。

宮森氏の同書の中に川柳の數句が譯されてゐる。この點に就て私の意見を述べたい。先づ同氏の英譯された川柳の古句と現代句を茲に掲げる。

町内で知らぬは亭主ばかりなり

All the town is aware.

Except her own hu band

いつまでか十九十九の白拍子

I or ever, dancing girls.

Are nineteen years of age.

孝行のしたい時には親はあし

One's parents are no more.

When one wants to do his duty to them.

子を賣つた金になづちの様に消え

The price of the daughter he sold.

Has vanished like lightning.

現代作家の句には次の様なものがある。

黒ん坊が黒ん坊を生んで安心し

A negre's fee's relived,

Giving birth to a negro.

芝居見た喉は亭主が嫌になり

The night she sees a play,

A woman hates her husband.

いつまでも生きてゐる氣の顔ばかり

Each and every face looks as if,

They expect to live forever.

一本のマッチに闇のたぐひをぬ

A single match,

Makes darkness flinch.

人格の裏を女に覗かれる

The secrets of fine character,

Are peeped into by woman.

獨房に親鸞を知り耶蘇を知り

In the solitary cell,

I knew Shinran and Christ.

一つ日に白と黒と黄の人

Beneath one sun do I've,

White, black and yellow men.

人生は再演でどぬドレーかな

Ah, human life is a drama,

Which cannot be produced again.

金持の家の下にも地震帯

Beneath a millionaire's house lies,

Also the earthquake zone.

目に見えぬ神なればこそ信じられ

God is believed in,

Because He can't be seen.

盗み心のないが乞食の自慢なり

It is a beggar's pride,

That he has not thieving mind.

親切に教へてやつてスリも乗り

Kindly advising about the route,

The pickpocket too go: on the train.

あの星が二人の國と詩人めき

The couple say, like poets,

“See! That star is our country”

以上原句と宮森氏英譯とを對照して讀んで先づ第一に氣のつくことは翻譯が原句に甚だ忠實である點である。餘りに忠實である爲めに原句の内容なり持ち味が明瞭でない憾みがある。例へば「町内で……」の句の如きは外國人がこれを讀んで、果して原句の意味を了解し得るや否やは疑はしい。其他の句に於てもこの英譯によつて詩として川柳を理解し得るかは疑問である。

川柳を外國語で翻譯すると云ふことは今のところでは全く斷念すべきである。川柳のもつ内容、表現、調子などは到底外國人には理解されるものでないと思ふ。

川柳とか俳句の如き世界で最も短かいシラブルからなる詩形を外國語で翻譯するには、私の考へでは三通りの方法がある。

第一の方法は原句を追語的に直譯する方法で、これは翻譯としては最も忠實なやり方ではあるが屢々原句の内容が不明瞭となり意味をなさない懼れがある。第二の方法は原句を多少パラフレーズする方法であるが、この方法ではまづ大體の原句の意味を傳へることが出來得るかもしれないが冗長に流れ易く短詩形である川柳の意義を没却することになる。第三の方法として

は原句の内容又は調子を表現するに自由詩——最も短かい——の形式をとることであつて其爲めには原句にない辭句を使用しても差し支へはない。例へば「釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな」を次の如く翻譯するのである。

靜かなお寺の晝下り

胡蝶は鐘の上に羽を休めてゐる

——眠つてゐる様——

川柳の翻譯は俳句よりも一層困難である。それは川柳のいい句には主觀が力強く出てゐるからであつて、もしそれを平凡に翻譯すれば全く原句が臺なしになつて何等詩としての價値を失ふからである。

これに關しては尙よく考へる餘地がある。

三月例会

日時……三月十日(金曜) 夕六時半

會場……道頓堀俱樂部

大阪市南區日本橋南詰東入南側
天牛書店(電話南二七四九番)

兼題……「喫茶店」 三句 路郎 選

會費……三十錢 (鉛筆御持參)

(幹事) 鮎美・禿山・豆秋・水車・綠雨

川柳雜誌社

[illegible]

武玉川初篇研究

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

梅森蛭
本
秋
東
省
農
二魚屋

時雨と雪と二度に逢ふ瀬田

省 二 比良の暮雪、唐崎の夜雨の取合せを頭に置き、瀬田は長橋である。

秋農屋 解説するの必要も無いやうな、平凡至極の句だと思ふ
東魚 比良の雪、唐崎の夜雨もさる事ながら、此句は瀬田
の橋の極めで長い心持を詠むもの、はら／＼と時雨が來たと思ふ
る。と、渡りきらぬうちに又チラ／＼雪に逢つたと云ふのであ

254

醫者の口から洩れる隠れ家

省 二 醫師は徳義上も、患者の病名など濫りに他にもたすを許されぬのだが、不圖隠れ家を口述べらす。醫師であるから躍如としてゐる。

秋農屋 昔の小説にあるやうな、敵を持つた者の隠れ家で、それが醫者の口から露顯するのである。

東 魚 明治時代の小説にありさうな筋だ。敵持ちでも落武者でもよろしからう。

金掘の佐渡へふり向天の川

省二「あら海や佐渡に横たふ天の川」(芭蕉)を踏んで、
鑛夫が佐渡を振向く。

秋農屋に鑛夫自身が佐渡を振向くのであらう歟、これは芭蕉の句の二番煎じで、天の川が金を掘出す、佐渡の方へ振向く、といふ句意だと私は考へる。

東 魚二兩様に解せられる。鑛山を去つた鑛夫が、やはり働いてゐた佐渡を懐しみ振返る。丁度天の川が佐渡へ横はつてゐる。——又附合の句としてみれば、秋の屋翁のお説の如くに

も考へられる。

(256) のれんの外へ口上の尻

省 二 首丈けが暖簾を分けて、内で口上——口上の尻とは頗る簡潔で面白い。

秋農屋 二 これは何處の暖簾であらう。劇場ならば幕であるから、見世物小屋であらう歟。それに看客に尻を向けて、口上に述べるやうで少し可笑しいと思ふ。

東 魚 二 口上は芝居や見世物ではなく、單に使ひにやられた先きの趣きである。例へば送り膳を届けて來たとも云ふやうな場合など想像してもよろしからう。

(257) 正客をつふす積りにずつと立

省 二 「つぶす積り」は、酒で盛り潰すの謂。

秋農屋 二 盛り潰すのであるが、「ずつと立」は少し穩當でない「そつと立ち」の方が宜くはない歟。

東 魚 二 私は「ずつと立」が大變面白いと思つてゐた。正客が仲々酒豪、一つ己がお相手をしやうと、酒なら自信のある者が、やをら立上る有様——當人もかなり酒が廻つてゐる氣分、今迄座も崩さず傾けてゐた光景が連想される。

(258) 揚屋九軒て可愛かる馬鹿

省 二 九軒は大阪新町遊廓（玉造の九軒茶屋が移轉しての名稱と云はる）——馬鹿に含著あり。

秋農屋 二 馬鹿旦那か馬鹿息子か、遽に治定し難いが、遊廓には乞食の如き白痴者が居て、妓樓で可愛がられるのが有る。それを咏むたものとも解される。

東 魚 二 私は確的に後説通りであると思つてゐた。

(259) あわれ也狂ふ時には男聲

省 二 音聲許りでなく、舉動も活潑とならう。

秋農屋 二 ヒステリイの女房、可憐、可嘆。

東 魚 二 調子は益々甲高いなり、男聲でもなからうが、言葉などの荒々敷なるのを、かう云つたのであらう。

(260) 琵琶かなるとは親類の花

省 二 枇杷の花と琵琶を弾き得るとは、親類の花ぢやと掛けた氣味はなきや。

秋農屋 二 昔の町人でも琵琶を弾いた者があつた。それも今の薩摩や筑前でなく、純粹の平家琵琶である。現今では平家が廢れさうで、これを善くする者は、東京に一人か二人であらう。

東 魚 二 「なる」はやれる意味。琵琶は餘りやる者もなく、又上品なものだから、親類の花と云つたのであらう、花と云ふから人物は女性か、さすれば本當に辨天様のように美しいのであらう。枇杷の花にかけたとは思はぬ。

(261) 舛て喧嘩を分る住吉

省 二 梃市即ち寶の市は、攝津住吉神社に於て、九月十三日黄金の日に新穀を盛りて供ゆる神事で、人群衆し、升をも賣つた。今日では十月十七日の行事である。

秋農屋 二 梃では少し茶氣が足りない。酉の町の熊手だと宜いのであるが。

東 魚 二 全く同感。

省 二 升を詠むた作は非常に多い。「梃がながれてしろい住吉」(ム十四)。「松風計る住吉の梃」(武六)。現在ではどんな風に執行して居るのかといふに、當日市女に南地五花街の藝妓(十名)が奉仕し、午前七時祓をうけ、宮司以下神職、齋、市女稚兒、八乙女等隨從。行宮所に到り、市女は五穀を梃に入れて供進、齋は紅白の朱環を、稚兒は絹布を奉獻し、攝泉兩國の商賣繁昌、五穀豐穰を祈願する。市女には戴盃式、粉黛式があつ

て以て、一人前の巫女たるの意を表現するのだ(藤里氏報)。昭和七年には三十年間絶えてゐた古式寶物授與神事が復活したため、参拜者五萬突破と新紙が報じてゐた。樹市の名は殆んど廢語に等しくなつて居る。

(262) むかしくの聲に高札

秋農屋 狂言記などに、高札を建てて雇人を募集するのがあるから、聲を募集した事であらう。馬琴の小説「椿説弓張月」卷之二に、高札ではないが貼札をして、聲を募集する一場がある。

東 魚 前句に因ては面白い附けであらう、單獨にみても句柄がのびやかで、大まかな氣分が良い。私は「花聲の鼻の噂も日永かな」とある席上で作つたが、關聯した氣分が此句を面白く思はせるのかも知れぬ。「たかふだ」と讀む方が調子は良いが「かうさつ」と讀むのだらうか。

省 二 どちらにも讀ませた例がある。調に従つてよい事と思ふ。

(263) 吞やうに水のなくなるちらし書

秋農屋 形容が餘り誇大に過るやうだ。上流の女の文をかくのであらう。

東 魚 誇大であるが面白い、達筆な趣が想像される。

省 二 散し書だから、吞むやうにと用ひたのではあらうか

(264) 日にやけた娘を譽る宇治の春

省 二 八十八夜前後が茶摘の尤も急しい時期。「茶摘時皆緋おどしの二布なり」の句もある。日本山海名物圖會には、頭に手拭を置き、胸に籠を下げ、腰掛けて摘むで居る。

秋農屋 「宇治の春」は、今ならば「海濱の夏」とする所である
東 魚 但宇治の方は働き者、海濱はスポーツ女性、月並臭

あり佳句とは思はぬ。

(265) 異見の側を通るぬき足

省 二 異見されてゐる側に、まご／＼してゐると、お前も座つて聴いて居れなどと、とばつちりが恐ろしい。觸らぬ神に祟なし、拔足で通る。

秋農屋 傍杖の中らぬやうにするが可い。

東 魚 面白い。叱られる者への氣つかひもあらう。

(266) 鳴子曳戀には賣れぬおとこ也

省 二 いっぱしの男がやらなくても、鳴子曳なら子供か老人の役目でよい——或は不具者でも。「角力取それから先は鳴子引(ム十二)。然し「むすび置鳴子や寝も一人役」(馬光)で無責任でも居れぬわけだ。

秋農屋 鳴子曳や瓜畑の番人は、老人か不具者が低能者で、戀愛には縁が遠くに違ひない。

東 魚 賣れぬは面白い。値うちのないの意だが、かゝる言葉の遣ひ方は江戸人の喜ぶ所であらう。

(267) うらやまれたる山人の脈

省 二 「やまびとの書飯埋む落葉かな」(東和)。「やま人の赤い物喰ふ寒さ哉」(柏筵)。山人は杓、健康體をみよ。

秋農屋 古今集の序に、「たき木負へるやま人の、花の陰に息めるが如し」とある山人で、孰れ筋骨の逞しい者ばかりであらう。

東 魚 脈と云つた處が面白い。

(268) 一日の奉公納に床をとり

省 二 女中などは皆そうである。奉公納なる言葉に興を覺えた作。

秋農屋 奉公納と餘り使はぬ言語を使つた耳で、佳句でない
東 魚 其のあとの奉公をしては、おだやかでない。

(279) 新造の恨に骨はなかりけり

省 二 新造は年の若い花魁見習、考人客の相手をして愛されたもの、あくどい手練手管もなく、恨みに骨もないわけ「笑はねば咄のできぬ小傾城」である。

秋農屋 海千山千の花魁などと異なり、新造は已につらい客を恨むにも、餘り執念深くないと云ふのである。又此新造は賣色でなく、素人の年増女に對する、新造かとも思はれる。

東 魚 矢張り遊里の方であらう。「すかないぞよ——」なんて云つても根も葉もないあどけなさがぬけないのである。「骨はなかりけり」は面白い。

望樓之部

(270) 藪入の顔は濃くなり薄く成

秋農屋 殿女などの藪入に、その行く先に依つて、或は濃く或は薄く、白粉を顔にぬるといふのではない歟。

東 魚 恐らくお説の如くであらう。芝居行に濃く、墓詣に薄くとも云ふやうに。

省 二 白粉を塗る事であらう。

(271) 三世相にも水はつめたき

秋農屋 自分は三世相をみた事が無いが、水といふのは、水性のことでは無い歟。

東 魚 三世相をみやうが何をみやうが、神武この方、水はつめたいものさ、といふ洒落氣分であらう。

省 二 母が見てゐた三世相があつたが、幼時ゆるゑ内容など注意しなかつた。昔の人はよく三世相をひつくり返したものの、冬の炊事など苦痛であつても、水はやはり冷めたいのが本性だ

三世相を見ても致し方なしとならむ。

(272) 下闇に火の恩ふかきうつの山

省 二 宇津山（駿河）葛細道は、伊勢物語により名高く、「道細く山深ふして幽寂たり、茅すき萩萩篠竹生茂りて、藤蔓蘿から足にまとひ薔薇荆棘秋を閉て歩しがたく、二人の手引の者鎌をもて叢を薙刈て登る」で、大江丸に「葛分けてかへ駕きたりうつの山」の句もある。斯る木下闇には、火の恩ふかき事である。

秋農屋 松明を握つて、木下闇を往くのであらう。

東 魚 松明がなかつたひにはなア……といふ感謝の心持。

(273) 吉原に實か有て運の盡

省 二 「傾城の嘘をつかぬも怖いもの」なのだから「女郎買裸になつて蘇り」である。「傾城にかわいがられて運の盡」此句は洒落本、「夜色のかたまり」の評言に用ひられて居る。

秋農屋 吉原でふられて歸る果報者の裏である。

東 魚 運の盡といひながらも持てた得意さが思はれる。

(274) 文か届て替るタくれ

省 二 彼女氏からの文が届いて、夕暮氣分が一層そはつく秋農屋 朝や晝であると思案するのだが、夕暮は天氣と共に、人の氣が變り易い。

東 魚 夕方の淋しさに、つくねんとしてゐたのが、急に浮きくするであらう。替る夕暮の現方が要を得てゐる。

(275) から蛙の眼へ節分の豆

省 二 「鹽引の腹に三つ四つ年の豆」。乾蛙と鹽引の相異は前の句釋に出た。

秋農屋 鬼の眼でなくて乾蛙の眼が、此一句の主眼である。

東 魚 窪んだ乾鮭の眼へ撒かれた節分の豆が、一粒落込むだと云ふ細い所を見付けたのであらう。

(276) 弘法の惜しい事には細工過キ

省 二 「佛師屋をしても弘法喰へるなり」などとも言はれて居るが、石芋や井戸水傳説の如き多分に細工過ぎである。「弘法のつくばもからくり」(金下) 因に武八には「日蓮宗はどれも細工者」ともある。

秋農屋 弘法には石芋の外にも、これに類似の傳説が多く有つて、如何にも細工過る。

東 魚 大師地下に微苦笑。

(277) うそつきに來た傾城は寄掛り

省 二 四十八手の一つ。

秋農屋 浮世繪に多くみる圖である。

東 魚 實に巧い云ひ方をするものと感心してゐる。

(278) 鯉賣呼て家内の顔を見せ

省 二 初鯉を呼て家内——殊に女房が買ふかどうか、顔をみせに不安が表はされてゐる。まだ來やしようと女房云ひではお話にならなくなる。

秋農屋 女房は兎角に吝嗇だといふ、世間の定評は辞めない東 魚 呼んでは鯉賣と家内と兩方にかかるやうな心持であらうか。私は珍らしいものに家中が出て見るやうに解してゐたのだから、如何であらうか。

(279) 誓文に立る刀はまくら元

省 二 誓文立とか誓文儼などの言葉もある。刀にかけて誓言を約束する。「枕元」に複雑な情調がわく。

秋農屋 重病の人に後事を依託され、其枕元に於て、刀に懸け

て誓を立る、といふのであらう歟。

東 魚 寝てゐる人が枕元の刀の所有者らしく思はれる。何か寝物語に刀にかけしも嘘は云はぬといふ様な場合ではないのか。(吉原では刀は茶屋が預るのだから、賣女相手ではなからうが)。枕元のあの刀に對しても嘘は云はぬよ——と云ふので腰元相手などの戀でもあらうか。

(280) 西瓜の水も遠いたしなみ

省 二 今日でも西瓜糖などが賣れる如く、止煩湯、解暑熱利小水、治血痢、解酒毒等の効能があるからであらう。

秋農屋 西瓜糖といふものは、明治年間に創製されたもので昔は西瓜から水を探るなどと云ふ事は聽かなかつた。これは恐らく糸瓜の書誤であると思ふ。

東 魚 そうかも知れぬ。然し原本は明かに西瓜とある。

省 二 「化粧水取つたぬけがら足袋に入れ」で、糸瓜水は何人も知る處、昔の事は知らず、近く美粧術の本をよむと、西瓜糸瓜、胡瓜の水を用ふる記事があつた。「薩摩櫛もとの心を西瓜水(調和)なる古俳句はある。西瓜糖の事は、古は天生白虎湯と稱したらしい。

(281) 無理なまくらて大阪へ着く

省 二 此句ケイにもある。伏見との淀川舟航。「目が覺めてみりや大阪になつてゐる」。着いた處は八軒屋。荷物を枕、いや雑こねで、人の體を枕にしてゐたのもあらう。

秋農屋 旅行李や風呂敷を、假の枕となして十三里の舟路を夢の間に過るのである。

東 魚 私はある俳席で「秋暑き荷により眠る夜船かな」とやつた事があるが、此句の輕味「無理な枕で」の巧い云ひ方に對して、全く汗を覺える。

(282) 冬籠我も昔は尻しらす

秋農屋 〓「今こそあれ吾も昔は男山さがゆく時もありこしもの」古今で、昔の非行を追想して、頭を掻くのである。

東 魚 〓洒脱な老境に入りかけた、人物が想像される。

二 〓冬籠といふと縮込つてしまふが、之は洒落氣がある

(283) おとこの眼にも凄子おろし

秋農屋 〓中條流の女醫者の眼は、頗る凄味を帯びて、光つてゐたかも知れない。

東 魚 〓門口を通つても、不氣味な氣がされたであらう。

省 二 〓男の禮驗も得ない事丈に、いやな感がある。凄く眼に映する筈だ。

(284) ひよくの鳥も顔が見らるる

秋農屋 〓誰に顔を見らるるの歟、又「比翼の鳥」とは、仲のよい若夫婦歟。花魁の色客歟。

東 魚 〓仲が良いに極つたものの、だと云つてあんまり良すぎるよと云ふ心持ちではないか。

省 二 〓此句丈けでは餘りに朦朧しすぎてゐて、判斷するに心苦しい。

(285) 世の譽事の晴天に死

省 二 〓大風大雨大雪の日に死だすると、前生の噂などさへ出る。私も晴天に死にたい、西行程の注文はせぬ。

秋農屋 〓今日の佛は善い人であつた故、葬式の日も天氣がよい、定めて後生もよからうなどと、世間の人の屢々いふ處である
東 魚 〓雨なら雨で涙雨だといふ。死者をいとはしむ人情の美しい處だ。

(286) 眞四角に突出し物の神樂堂

秋農屋 〓初午の稻荷祭などに、有合の杉丸太などを用ひて、假に神樂堂を建るのであらう。

東 魚 〓よく分らぬ。「突出し」はツキダシかツキデシか、何れだか判斷に迷ふ。句意は多分前説のやうな事と思ふが。

省 二 〓ツキダシと讀むでゐた——(衆出——神樂堂なら四角なものではある。

(287) 幾度か盗れ死なれ歌枕

秋農屋 〓歌枕とは和歌に詠まれる名所、又は名所の名を集録した書の事であるが、「盗れ」は兎も角も、「死なれ」が不明である。

東 魚 〓死ぬやうな目に逢はれの意ではあるまいか。夜盜に逢はれたり、九死に一生を得られて歌枕をさぐられた、とても云ふのか。

省 二 〓實際に死むだ場合と解してはいけなからうか。

(288) 孕む稻かわつた物を夫に持

省 二 〓稻妻の謂(稻の殿とも云ふ)。稻交、以て稻よく稔るは、爲めに虫落つる故なりと。

秋農屋 〓額に二本の角が生へ、裸体に虎の皮の褌を締めた亭主では、如何にも變りすぎてゐる。

東 魚 〓全くかわつた詠み方をするものだ。

(289) ひよこの咽の乾く若竹

省 二 〓今年竹とひよこの取合せ、初夏の感じ切。

秋農屋 〓杜工部の、竹根稚子無人見、沙上鳴雛傍母眠。といふ詩句が聯想される。

東 魚 〓咽の乾くなんといふ見方が、實に我々が思ひもよらぬ處だと思ふ。それは明治俳壇が寫生立脚の主張に風靡されて我々もその影響を確に受けてゐるから、とてもかう云ふ句は出ないのだとつくづく考させられた。

山作柳村

路

郎

選

湯豆腐へ今日の不平を忘れかけ
皆出世して居る賀状座りかへ
見込ない様子不況をかこち合ひ
ビルの窓下界の事故を覗くなり
道の痰踏まれずにある冬一ト日
出戻りの目薬注して家に居り
冬の激情に埋れてゐる私
抜毛をてのひらにのせてひとりぼ
素直に抱かれる酒なき夜の女
春の帶胸一ぱいに百ワツト
爪弾の窓の若竹風があり
嘘ついた柱鏡が青くあり
嫁ぐ日のいつのことやら大晦日
元旦を務めてやはり一ツとり
銀世界食はんが爲の靴をはき

尼
崎

松
江

島
根

大
阪

長
野

同同白同同巷同同羅同同大同同柳

菊

二

門

門

兒

飛

燕

往

來

私信のことすから公開を要するやうなこ
ろは省略、中略、下略、又は×の伏せ字
にしました、御読水を乞ふ。

▼蛭子省二君(朝野)謹啓、御端吉と短冊入手
私去四日夕刻より發熱、其儘倒れて今日に
及び居り、喘息併發のため苦悶二倍。いつ
もながら、ヒドイ目に含ふ事に候。下熱し
て喘息のみ残る當分傳中の者に候。全快致
し衰弱回復仕りなば、直に揮毫して御一笑
を買ふ事に候。

昨日信州の柳風宮より電報頂き、鈴牛坊君
御永眠と知り申候。お氣の毒に候。病狀も
仄閑致し居りし故、再起は不可能ならむと
察し居り申候。

ある人が私を、凡骨をつくりだと評し申候
喘息持のところ、瘦せたところ、猫背のと
ころ——その凡骨君も死去せしが、私はタ
ツタ一度會つたのみに候、曾て桂雨君とナ
ゴヤ東館本店離座敷に閑談し居る處へ、突
然凡骨君(外一人)がやつて参り候。當時は

關東震災にて逃出し、大阪千里山にト居。
どうも土地に合はぬから機會をみて東京に
歸りたいと申し居り候。はいつて來た時、
多きこしめしてゐたらしく、又喘鳴が聞
ゆるのに、馳けつけ三盃を越えて大にのむ
酒豪といふ体質でなく、意氣でやる方。然
し同患同情に堪えず、藝者に餘り酌がぬよ
う注意をする。私は一切盃は手にせぬので
「駄目だ」と、頻りに私の肩を叩く。
話は賑やか也。座敷は君ひとりのものとな
つてしまひ候。口角泡を形容詞通り飛ばし
あたり近邊には居れぬ位、立上つて一棚の

耕同洋同白
朗 乃 峯

翠 同 野 同 治 同 岩 同 笛 同 兼 同 葉 同

峯 郎 郎 石 秀 子 光

二月十日（路郎宛）

▼宮内親睦君^{タカヒ} 参月號分の投筒の折切手
が貼つてなかつた事と思ひます。正月元日
の夜出しなされたです。どこにも切手を賣
つてゐる所がなかつたものですから失禮と
は知りつゝも出しました。不足税共四錢切
手同封致します。どうかお許し下さいませ。
元旦夜出しなれば三日おくれますので。
すから切手を貼らなかつたのです。どうも
みませんでした。臺灣からは下手な出し方
をするとい週もかゝる事もあります。何を
言つても内地との通信は不便です。一週間
に三四の定期船ですけれど船が大きい故に
んなしなくても欠航する様な事はありませ
ん。それだけに安心です。内地は寒い事
です。おからだを大切に、きよなら

二日夜（經雨兒）

▼關本一瓢君(金澤) 肅啓、御申越の「梅鉢」別
送致しました。創刊號と第二號がありませ
るので御氣の毒です、その内見當り次第御
送付致します。

昨年博覽會記念川柳句會の折路郎先生、貴兄かほる氏の御來澤を得てその刺戟により生まれましたのが加能川柳社であります。取りも直さず生みの親と甘へたい様になり

二人目の子からやうく世帯じみ
 あした嫁くの車内でくれた秋波など
 此處から遣入れと詩人窓を開け
 初日の出拜む首巻父に借り
 酢昆布をかんで境遇疑はす
 郵便夫の丈夫な脚を見送れり
 鐵蹄を打込む仕事とは悲し
 魂を偽る酒が胃にしみる
 受話機の冷たき極月二十日なり
 親しめぬ友の書齋の大き過ぎ
 袴脱いで早春の膝冷を知り
 回禮の仕舞を嫁の里で酔ひ
 池へ降る霰は何の曲もなく
 久々をお茶一ぱいで扱はれ
 真夜中の鏡に二人きりの部屋
 好きな娘を呼ぶ唇のしびれて居
 虐欺の戀去年の辻のそれきり
 降る雪へ警笛ばかり鳴り響き
 日曜を行けば繼子が留守居して
 まだ戀にならず朝の顔馴染
 今日だけは抱いてもやれぬモーニング

大 京 同 同 同 同 大 長 同 大
 阪 都 同 同 同 同 阪 野 同 阪

同 佐 同 阿 同 あ 同 文 同 菊 同 荷 同 青 同 有 同 勝 同 沐 同
 津 や 美 蝶 路 平 米 郎 二 天
 美 鴻



ます。早速御後援を御願ひ致す考へに
 ました。が何分にも初心者ばかりの集り
 て中央に殆ど知己がありません。爲
 失禮致して、おりました。これを機会に
 絶大の御援助下さいませ。雅兄は申すに
 及ばず先生にも御取次の勞を是非共
 御願致します。尙雅兄の御骨折りにて課
 題吟の選稿を御願ひ出来ませ。方々
 を二三御紹介下さいませ。でせうか切に御願ひ
 致します。突然無様な事を御願致します。申
 譯ありません、御免下さいませ。(編雨苑)
 ▼前田五健君(松山) お手拭頂きまして、有難
 う御禮申上ます。スツキリしたもので感心
 してゐます。何やら彼やら恩を被るのみで
 酬ひられぬを恥ぢて居ます。路郎師による
 しくお傳へ下さい。松山の正宗寺子規の遺
 物も灰になりました。惜しい寺を焼いたもの
 です。五健は其の炎の中で涙が出ました。煙
 の爲めでありません、淋しい大銀杏も半焼け
 春の芽が果して出るでせうか。(編雨苑)
 ▼龜井花童子君(前橋) 本社神尾三休氏は来る
 二十九日(日曜日)午後六時二五分 JOV K
 より「川柳を味ふ」の題下にて放送致します
 同好者の御聴取を祈ります。
 一月二十六日(路郎苑)

結婚消解問題起る

同	同	大	松	同	大	東	同	同
發	發	版	江		版	京		
池								

十二月の夢

關
本
雅
幽

—(22)—

ほんとうの色でカマヤリ死んでゐる
 煎薬を匂はせてゐる二階借
 欠伸した窓に淡雪とけかゝり
 落ちぶれてく居る靴の紐
 春の宵仁丹がある袂にて
 落ちかゝる十銭すしへ手を擴げ
 もの言はぬ人に月あり銀の月
 病院の着物で暮れしお元の
 恩給の父へ萬年青の鉢の數
 想愛の中で墓口だけは別
 寺の鐘寺の鐘京に住み飽きる
 エンデンを吐き出る水の遺憾なき
 ポーナスに負はせ切れない高になり
 事情はあるだらうに新聞遠慮せず
 淨化する雪とはお前ブルジョアよ
 大臣になればゴルフが覺えられ
 君一人泣かせはせぬと猪口を受け
 榮轉へ急に惜しがる面白さ
 齒車が軋る工場閉鎖の日
 舊友の謹賀の文字も天氣なり
 相愛へ金が汚たなく見へてきた

同 松 神 登 大 京 松 鳥 尼 高 島 堀 高
 江 戸 池 阪 都 江 取 崎 松 根 知

巷 同 翠 同 繁 同 愚 同 い 同 木 同 横 同 湖 同 虚 同 冬 同 半 同 田 同 曲 同 鐵
 巴 句 樓 堂 寵 を わ 郎 公 鶴 吉
 山 生 白 山 郎 公 鶴 吉

なしより温い室の方がよかるじやない
 か。
 ソラあんたはあんまり色氣なしだからよ
 すぐにお酒上がると何處へでもうぐう
 寝るのがあんたの十八番ね。
 なんば寢坊助でも枕元でウーウウ、ウ
 ーウ、ウアーアーアイとあれだけ
 やられるとかねわんよ。
 チビリ、酒、チビリ、酒……..
 あんたまた奥様の角の事考へとんの。
 なあに、朝風呂丹前朝酒ほろりとなる
 と已れの心はまに彼の紅葉を散らす風
 と遊びたくなるんだよ。
 わたいかてあんたが居てくくれる間は紅
 葉の散るのが面白いわ。
 大きに。帳場から勘定書さへ來なきや
 吉田御殿の與吉さんちやがな。
 いやらしい。ポーン
 お痛た、序でに肩をもんで貰ふか。其
 の變り此の間の新聞記者とか言ふ好き
 やんの惚氣の續きを聞いて上げやう。
 そうく彼の方から十日程前にやつと返
 事が來たのよ。其の終ひの方にね、とて
 も意味深長な文句が書いてあるのよ、
 どんな事をい
 市松人形どの男にも惚れて居す——てさ
 憎くらしいぢやないの。だけど市松人形
 でしやれたところ面白いと思ふわ。あん
 たどう？
 其の男に今度逢つたら漫りに著作権を
 盜使すると告訴すると言ふお客があつ
 たと言ふといてくれ。
 著作權で、なんだんねあんた怒つたの？

元日を迎へて

大 阪 神 戸 大 阪 松 江 大 阪 愛 媛 大 阪 愛 媛 大 阪 大 阪 京 都 大 阪 大 阪 大 阪 石 川

鶯路堂子捐子雲磨三子美 夫葉舟平笑朗佑彥郎

高橋かほる

「な、女房をはめるじや無いがまゝもたして、水仕、朝夜たびの楽しみを、一人笑みしてエエ、来りける……」

と上手に唱い、三味線を提げて行きます……

ササガ三味線屋の丁稚に、十二月でも、陽氣なコツチやおまへんか……

い、やさ己は市松人形が大好きな本家本元だからよ。
わてえかて市松人形大好きよ、あんな男に惚れて貰らんかて。
アハ、ハ、ハ、僕もそれで安心したよ。
もう酒もほろにがくなつてきた、ウウウーイ
もうお歸へりになるの、今晚も歸へさなないわ。
君今市松人形が大好きだて言つたぢやないかい。
チエ、奥さんの角ばつかり恐わがつてさもし歸つて角が生えて居つたらすぐに引つ返へして来るがな。
だけど正月までに、も一夜來てほしいわ。金と暇と氣分と三つ揃つた、其の時、に。だな。
待つてゝよ、叱度、さようなら。

俺をよう忘れなんだよ年賀状
神聖に思ひつゞけて倦きられる
羽子板へ素見して見る藝妓つれ
鐵椽の眼鏡冷笑してゐるなり
時計ばかり夜へささやいてゐる寒さ
朝風呂に這入つて見たい小僧也
飾窓の毛皮へ寒い欠伸する
夜店出しぼろくそに言ひ金儲
鹹首つた人が賀状を呉れてゐる
心憎く澄みゐたりはらつばの口笛
口止あをされてゐるかと語り出し
見てほしい氣球師走の空にゐる
自尊心きづつけまいと嘘を云ひ
萬一を思ひ日記にうそをつけれ
あせり氣な男の戀がうたぐられ
病める子へ正月狭く明けて暮れ
春風は女の足から袂から
冷たさが鋭いメスのやうに刺し
出藍の譽恩師も鹹になりし
阪急の雑踏の数に俺もゐる
三人の中の一人にある不満

島根 大坂 豊後 大坂 岡山 大坂 神戶 同 松江 大坂 愛媛 大坂 兵庫 大坂 松本 大坂 石川 大坂 石川 大坂 大阪 今治

夢 露 寂 雀 進 冷 壽 法 狂 世 湧 遊 一 正 冬 醉 しい 富 曉
人 光 洲 光 朗 平 櫻 夫 子 泉 都 象 水 步 騎 司 光 羊 助 しの 士 童

松竹座

中西おさむ

松竹の營業所が焼けて二日目、私が九條から青バスで長堀橋へ向つてゐた正午下りのこと――

途中からそのバスに乗つた二人の令女の會話を私は隣で聞いてゐた。

「腕時計があなたのより五分進んでゐる」

「東京のお友達から手紙が來た」

「ゆふべコーヒーを飲みすぎて眠れなかつた」

といった事から少しく對外的になつて

「來月の×日に同窓會があつて×子さんの素晴らしいピアノが聞けるから貴女もいらつしやい」

といふやうな話をしてゐた。

その内にバスが四つ橋を過ぎると彼女の一人が

「ゆふべの火事ね、わたし松竹座が焼けたかと思つて本當に吃驚したわ」

「ウチもよ」

と今一人の彼女が目大きくした。

彼女等は間もなく心齋橋でバスを降りた。

彼女等の憧れの松竹座そこは又彼女等の虚榮市場である。彼女等の生活の對象としてなくてはならぬ一つの角度でもある。

「松竹座が素晴らしかつた銀狐」

芳 柳 吉 迂 白 岩 寒 鴉 愁 榮生明改 小 孤 雷 研 玉
松 一
岸 人 祥 均 蝶 帆 月 天 霧 吉 園 鶴 兒 路 兒

淋しく響いて来る時、僕は哀愁に誘れて行くのを覺えるのだと同時に何物か？に觸てゐるのだ。その時心の隅で小さく叫んだ。「センチメンタル」物事に觸れ易い僕が何となく寂しくなるのだ。こんな夜は二人で歩きたい物だ。僕はその寂しい想念を捨て、明るい朗かな事を考へる様に懸命した。「青春の希望」その時、僕はあの優しいM子の事を思ひ浮べた。同時に女性の熱い受撫をして抱合を幻想した。あゝ女性の魅惑、朗らかなハートの中、美しい豐滿な肉體。僕はそうした快感に酔ひしれようとした。月光是益々冴てゐる。一人の心を抱きしめて、町の方へと偉ひ續けた。水面へエロサーピスの灯が揺れる、華村。青い灯、赤い灯は僕をまねてる様に明るく眼を射るのだ。あゝ「寒い」と思はず叫んだ時はすでにカフエーのドアに手は觸れてゐた。いらしやいそれが私の務めです、恒子。色灯の下に動いてゐる女給の顔がなんとなく青白くなつて見える僕だ。邊はみんなグロテスク——ふと視線を奪はれて見ると、ビールのボスター何んと又美しい曲線美朗らかたる笑ひ——、その時路郎先生の句が思ひやられた。

女 十八 アダリンの夢 路 郎

少々いゝ氣持になつて又物を思ひつゝ、我家へ歸つて見ると、薄暗い光の下にいかにも僕の歸を祈つてゐたかの如く、川柳雑誌が伏せられてあつた。（七十二年九月夜記）



三笠附に據る流人 (下)

— 本誌十周年紀念大會講演 —

藤 里 好 古

是等の各島—伊豆七島全部に涉つて—は、「島法度」に據つて、本土との交通が嚴禁されて居り、漁船、廻船、難破船たりとも海難待避の爲め着岸することあれば、乗員は直ちに出帆迄困禁され、船体には嚴重なる看視が附せられ、過料として積荷の過半を沒收される規定となつて居ります。かくの如くして、極度に流人と本土との通信並に物品の受授を官を経ずしてなされることを恐れ、亦、各島の船は五挺櫓以下のものを禁じ、船具は所有者の家屋内へ納め、船体は陸地へ引揚げしめ置きて、流人の脱出を防禦する策が行はれて居りました。

護送船は毎年三月と九月に江戸靈岸島より、御船手與力一名と同心二名とに指揮されて出帆する定めでありましたから其船便迄遠島囚は特に「遠島部屋」へ入られ、牢内にて蒲團を支給されたのですが家族等と面會することは許されません。かくて發足となるや、赤梔、折敷、一人前と所用品を入れる吠一箇、並に手當錢として壹人當り、揚座敷者へは金二兩揚屋者は金一兩、雜人は金二分を官より支給され、家族縁者よりの差入れは、米は二十俵迄、錢は二十貫文迄、金は二十兩迄許可され、書物、双物、火打道具は嚴禁されてありました。是等の荷物を船迄運

搬する爲めに、一人當り一名の手足を支給されるのであります。かくて其行刑地へ船が着岸致しますと濱地に於て其嶋の地役人、年寄、名主、五人組等立會にて「流人引渡證文」と照合して與力より身柄を受取り、流人一同へ「流人法度」を讀み聽かせ、鬭引にて五人組へそれ／＼流人を配當して引取らしむるのであります。本土の縁者より差入あり、且つ持參金豊かなる者は五人組より與へられたる土地へ、家屋を營み「水汲女」と内縁關係を結びて、自由に生活し得らるゝが、差入並に持參金もなき者は、五人組の土地へ蒲鉾小屋を組み、自活の途を講ずる

か、或は百姓の手傳—實際は奴隷—をなして、やうやく生活するのみであつたのです。

水汲女とは、各嶋は天水を飲料とするか、山間盆地の泉より頭上搬出するの他、水を得るの途なし、此勞働に従事する下婢を云ひ、流人の婚姻は認められざれば此女と同棲することは、公然の秘密となれり。此間出生の兒は無宿者の扱を受けるのである。

此故に強健なる者は漁獵、伐採等の勞務に従事して粟稗等を食するを得れど、貴人富者等の流人は、あした草、虎杖等を摘みて喰ひ露命を續なぐより仕方ありません。新島に於ける寛文八年四月より寛保三年十月迄の、二百廿六名の流人に就て看察すれば、特赦歸國せし者八十三名であつて、九十五名は生活狀況の激變に依り病死し、廿一名は餓死して居り悲觀の極海中へ投身せるもの一名、縊死せる者四名があります。亦、廿二名の者は困憊憔悴の結果、盗みをなしたり、脱出を計劃したりして、處罰として簀巻きにされ、赤禿げと稱する此嚴科の行刑箇

所の斷崖から、海中へ投ぜられて居ります。以上を以ても如何に流人の生活相が悲雨慘風に充てる忌わしき情況であつたか、御解りになつた事と存じます。

「三等附」に據る犯人を何が故に、死罪以上の苦驗を嘗めねばならぬ、是等の各島へ流刑せしめしか、と申しますのは「三宅島流人帳」の寛延三年より天明元年迄の、三等附に據る流人五十三名の身分を検しますと、

武士十三名、家持町人十七名、職人四名、神主並に僧侶六名、無宿三名となつて居つて、比較的當時のインテリ相に多く、後に申述べますやうに、八丁堀の捕方や與力の御隠居が三等附の點者をやると云ふ如く、幕府の行政機構内から續々犯人が出現したからであります。正徳頃から正紀末の兆が現れ、寶曆、寛政となるや其極に達し、「反汗秘祿」の寛政五年三月の頃に記述する、西大路三位隆文卿なる公卿サンが、博奕の科にて行刑せらるゝと云ふ狀態に迄至つたのです。幕府は教化を疎んじて此世相を、彈壓と嚴刑に據つて矯正しやうとして失敗

したのです。此行政方針の犠牲となつたのが、三等附に對する斷罪でありました。「新嶋流人帳」は享保五年迄、各流人の項に罪科を記入して居りますが、以下は殘念なことに全部記入を漏して居るのです。依つて正徳六年四月より同年迄の三等附流人の裡、ローマンスある者のみ十五名を摘出して申し述べます。此十五名の流人の歸結を調べると、十名が特赦に會ひ江戸へ歸つたのみで、一名は餓死し、二名は病死致し、残りの二名が同島に於て惡事を重ねて、所罰されて居ります。こゝにローマンスと申すのは、此二名に就て其多くを語り度いと思ふのであります。

三等附に對する彈壓と追求の手が愈々密になり、其スケールを擴大して、此博奕を根絶せしむべく有司が劃期的活動を開始した、正徳六年四月の便船で、御船手河原清兵衛の支配下に在る、役人達に依つて新島へ、四ツ谷仲町の家持町人、四郎兵衛—三等宿主人—。小石川戸崎町の結城八兵衛—點者—、芝馬輪横町のまめがに安兵衛—金元—、松島町の善右衛

門、元赤坂町の字兵衛・神田横大工町の七郎兵衛、神田平永町の伊兵衛、本所柳原無宿の吉兵衛―以上句捨ひ―の八名が流刑されて來ました。此様に同類が一連託生的に、同一の嶋へ流竄されることは非常に珍らしいことであります。普通ですと三嶋へ分割せらるべきであつたのです。此内、點者の結城八兵衛は七箇年在嶋して、享保八年正月十三日に哀れにも餓死したのであつて、句捨ひの無宿吉兵衛は三年後なる同三年の春、嶋内に於て強盜を働き、搦め捕られて其年三月十一日に赤禿の地より、簀巻にして洋中へ投ぜられる死罪を行刑されたのであります。他の六名は享保七年十二月と同九年十一月の兩度に、特赦されて江戸へ歸されたのであります。

享保三年九月には、鮫ヶ橋谷町仲町の尺八師匠、庄左衛門―三笠宿―、麴町平川町一丁目の舩屋、ちよかん作左衛門―金元―、八丁堀幸町の與力の隠居、南部幸兵衛―點者―の三名が流竄されて居ります。此内、庄左衛門は在嶋三年にして同五年十月十五日に病死し、作左衛門は六

年後、同九年十一月特赦されて江戸へ歸つたのですが、與力の御隠居たる南部長兵衛は、博奕犯の紺屋庄兵衛、同く米舩四郎兵衛、同くたばこや勘兵衛、同くまめがら甚八、詐欺犯の無宿喜兵衛、逃走犯の無宿次郎吉等の七名の無賴漢と徒黨し、享保四年の春三月廿一日の夜、山手の民家へ長兵衛が放火し、嶋民並流人達が消火に奔命せる際に、一殆んど水の無き地なれば、叩き消すより他に策なし―七名は濱地へ引揚げある船體を水上へ引下し、附近の民家―消火に驅け附け空家に等しき―より、船具、海上に於ける食糧、防禦の爲めの刃物類を盗み出して積み込み、放火箇所より逃げ來れる長兵衛の到着するや、出帆して安房の鋸山を目標に進航しました。かくして月明かすかに船體を認め得らるゝ頃、島民の發見する處となり、徹夜にて早船は安房の北條伊豆の下田、相州浦賀、近海の各島へ逮捕の「浦觸」を捧じて、亂れ飛んだのであります。一方、脱出逃走者等は素人の悲しさ、針路を誤り伊豆大島の北西方の海上を漂流して居りましたが、廿三日曉

伊豆大島へ流人を護送する船に發見され何なく取り押へられ、同島へ困禁、四月五日新島へ護送され來り、島役所牢屋へ禁固されたのであります。讀いて江戸の評定所へ注進し、七月廿三日指令到着、其黄昏の頃、赤禿げより簀巻の上洋中へ投ぜられて死罪を行刑されたのであります。

千住二丁目の甚太郎は三笠附宿の御科で、享保三年閏十月流竄されて島へ參りましたが、同七年十二月に特赦に會ひ江戸へ歸つて居ります。

享保五年二月には、雲上人領西ヶ原村の文左衛門―點者―、東比叡山領中里村の兵左衛門―金元―、東比叡山領田端村の元右衛門―三笠宿―の三人が、新島へ流竄されて參りました。文左衛門は享保七年十二月に、元右衛門は享保九年十一月に特赦出島し、兵左衛門は同六年正月廿五日に病死して居るのであります。私に此三人に興味を感ずるのは、當時の司法行政機關の缺陷を狙つた點にあるのです。雲上人領は京都の公卿達の領地で、此地へ捕吏を入れるに就ては京都所司代

光耀抄

—選乃葭—

ローラーにおしひしがれし春の土
反省もなき健康よ茶がたぎる
ふるさと梅大阪は霧岐路に立ち
第六感の無駄を囓つたさらの紙幣
かたまれば女性の意気もはな
バスもさら御符もさらなり乗心地
嘘をつく瞳このごろわかつて来
父のみで親しみにくい家を出る
水車静かに山に裸に泌みる冬
鶏が市場の裏で鳴いて居る

大阪 大阪 大阪 大阪
大 阪 大 阪 大 阪 大 阪

機見女 同 同 同 同 同 同 同 同
公 子 同 同 同 同 同 同 同 同

ママとなり化粧の程を考へる
辨當と子供人並ぶ三笠山
思丹は神二池質にされて持ち
案丹は猿澤池でひとく足番
教會の世話方今日は下足番
有馬筆姉の土産にまじつて居
菜の花はあ○の屋根のはて
ひき汐に乗ぜずあさりさへ逃がし
ホツトレモンへ秋の銀貨ちやらつかせ

麻生 同 同 大 阪 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同
道 子 愛 子 美 子 美 子 乃 子

を通じて領主である公卿の諒解を求めねばなりません。東叡山領は上野の寛永寺の寺領ですから、寺社奉行を通じて上野の宮家の御許しを願はねばならんのです。兩所共江戸の近郊でありながら、町奉行も八州の役人も自由に手入れることの至難な處でありました。江戸に於ける取締りが峻厳であつたから、三笠宿並に其關係者の本據を、かゝる司法行政の比較的に緩慢なるより其手の及ばざる是等の地へ置き、句捨ひを江戸市中へ發遣して其身の安全を企てた奸策が、アリくと見え透ひて居つて、金銭さへ得れば、自己のみの生計が豊たかであれば、社會の

人々を惡の途へ墮し入れるも、法を冒かしても、何んのそのと云ふ、黄金狂的傾向が澎湃と波動してゐるではありませんか、然れば身は司法行政の職掌の家に生れながら、三笠附の點者をし、罪科を負つて流竄され、行刑地に於て脱走の指揮をなすに至りし、與力の隠居南部長兵衛の如き者が出現したのであります。徳川三百年は表裏の懸隔甚しい治世でありました。人格の眞格は逆境に於て發揮され、政治の効果は非常時に表現するとは至言であります。それは享保を中心とする凶荒天災並び至りし非常時に、文藝上の遊戲から三笠附てゝ博奕は發生、

無教養、人格劣等なりし當時の大衆の射倖心理と合致し、行政迫害嚴なりと云へ雖、社會に滔々と潜行し、此濁流に巻き込まれて、流竄の苦を嘗めるに及んで、惡夢より醒むる者あり、懊惱の極、餓死し水死し病死する者あり、更に自暴自棄盜をなし、脱走する者があると云ふやうに、三笠附に據る流人の動靜が物語つて局るのであります。纏りの附かない御話しを永々と致しまして、御清聴を煩しましたことを、幾重にも御詫ひ申上げて御別れ申します。

(完)

肱・枕・艸・紙(三)

梅 本 塵 山

【二十五】

文久三年二月、御進發と稱して、將軍徳川家茂が、上洛するに方り、江戸の町人等に對し、御用金といふものを課したり。予の家にもこれを課せられ、父は幾回か拒絶したれども聽かれず、遂に金壹百兩を差出したるが、其褒賞として、青銅二貫文を下渡されたるを、近頃まで自宅に保存しありしが、曩に某氏に望まれて贈與したり。御用金は、年賦償還の規定なりしが、只一面償還されたる而已なりきと云ふ。

【二十六】

昔の元日に、諸大名の登城の時や、東叡、三縁兩山の靈廟に參詣する時の、本式の行列は、一大壯觀なりしと聽くが、予は一回も見たる事無し。當時兒童等が街頭において、紙鳶を揚げてゐる所へ、大名の行列が通ると、俗に二本道具と稱する、長槍に糸の絡む懼れがある故、兒童が「御槍御免」と聲を懸ると、直に槍を横に伏せて、其處を通り過ぎたる也。

【二十七】

隅田川の一名称と稱せられる、白魚（鱠殘魚）は、徳川家康が江戸入府の後、尾州名古屋の漁夫に命じて、其卵子を輸送せしめ、隅田川に放ちたるが、漸次に繁殖したるものなれば、魚の頭に、三つ葵の紋章を頂いてゐると、江戸人は言傳へたれども、此紋章を頭に頂くといふ事は、全然捏造の説で採るに足らず。明治初年までは、冬の半より春の末まで、甚多く捕獲されて、漁夫の妻などが、大川端に出て、此魚を一樽蒲づつ薬舟に入れたるを、戸板の上に竝べて、往來の人に賣り居たり。

【二十八】

江戸各町の自身番屋といふものは、日夜、町役人が自身に出張して、非常を警備する所にて、現今の巡查交番所の如きものなれど、事無き時は、町役人は出張せず、事有る時にのみ出張し、平素は番太郎に打任せ置きたり。番太郎は町役人の小使と、夜警とを兼ね勤めて、妻子の

【二十九】

有る者もあれども、多くは獨身にて、番屋に隣接する家に住むもあり、番屋の一隅を借りて住むもあり、彼等の多くは、内職に草履、草鞋を作りて賣り、亦、小兒の玩具、駄菓子類を賣り、而して生活費の不足を補ひたるが、心懸の良き者は蓄財して、老後に故郷へ歸るも有たり

鎮守の大祭に、神輿の渡御ある時、各町に神酒所を設置するは、今昔相變る事無けれど、昔は家主の設置する神酒所は其費用を地主において負擔なし、町内の若衆等の設置するものは、全町表通の各戸に就いて、應分の寄附を仰ぎ、一切の費用に充てたるが、萬一其寄附金を拒む時は、神輿の渡御するとき、故意に神輿を、寄附せざる家に早ぎ入れ、或は軒先を打毀しなどして、紛議を惹起する事もありし。

【三十】

江戸の末期に、草履下駄といふものが行はれたり、これは齒の無き厚板の臺に

を編みたる表を附けて、木綿の眞田織を鼻緒となしたり。此下駄を穿く者は、裏屋住居の細民の子弟が商家の小僧に限られたり。明治年間に出来たる、板草履といふものは、昔の草履下駄の臺を、聊か改造したるもの也。

【三十一】

當日いよく上野公園の大佛前に、一同整列して、兩陛下御同列の御馬車の通御を拜し、豫て練習せる如く、萬歳を三唱したれど、孰れも心臆して大聲を御し得ず、不体裁を極めたり。此れが近く萬歳を三唱する事の始めなりし也。

【三十二】

江戸市民中には、繪本錦繪類を賣りし繪雙紙屋といふもの多く有りて、其店頭には、孰れも美貌の女子を出し置き、而して客を惹きたり。此れは賣春行爲などは無かりしが、窃に○畫猥本を賣りたりと云ふ。明治の末頃より、繪雙紙屋は、漸次廢業したるが、其中には雜誌店に轉業したるも有りたり。

【三十三】

萬歳を三唱するといふ事は、天皇の御即位式などに、古く行はれたるが、江戸時代には、一般に行はれたる事無かりし也。然るに明治廿二年二月十一日、帝國憲法が發布されて、翌十二日、上野公園に於て、東京市民の大祝賀會を行ふこととなり、式場に天皇皇后兩陛下の臨御を仰ぎたるが、その數日前に、市内の各區役所より、當日車駕を奉迎する者は、萬歳を三唱すべしと口達されたり。此口達を受けたる市民等は、萬歳を三唱するとは、如何なる事をなすもの歟と、有志者を區役所に遣りて訊問せしに、吏員は先づ音頭取が「天皇皇后兩陛下」と發聲する後につきて、一同が「萬歳々々萬々歳」と高唱する也と誨へたるを、立歸りて一同に通達したるが、萬一其場に臨みて、萬歳を三唱する時、不都合ありては恐れ多しとて、數回發聲の練習をなし、

女子の西洋風の束髪は明治十八九年頃より東京に行はれ始めたが、此れは日本風の結髪より甚便利なれば、將來大いに流行するならむと、予は想像して居たりしが、四十餘年後の今日にては、舊態の結髪を凌駕して、束髪全盛の世となりたり。明治の中葉までは、島田髷も丸髷も、前髪は少さく、髪は廣く張り出さず現今の如き醜態のものは、絶えて無かりしなり、亦、昔有りし、おばこ、おた

らひ、達磨がへしなどといふ髪形は、全く廢れたるが如し。十五六歳の少女が結ひたる、唐人髷といふものも今は看えず桃割れといふ髷は、昔は十四五歳の雛妓か、花柳界の少女等が、専ら結ひたるものなるが、今は二十歳前後の、良家の女子が結ふ事となれり。

【三十四】

明治元年の春頃より、官軍に屬する諸藩の武士が、江戸に多く入り來り、市中に横行闊歩したるが、其官兵と幕兵とが街頭に於て屢々衝突して、血雨を降したる事も有りしが、幕兵の中には、故意に官兵に衝突して、敵手の肩章を奪ひ取り、これを大なる手柄としたり。官軍の將士は、錦の一小片を肩章となしたるより、市民等はこれを蔑視して、彼等を、きんざれと渾名せり。此肩章は、了も屢々見たるが、幅一寸長二寸許の錦の裂なりしが、其頃出版されし「名譽新談」と題せる、月岡芳年の筆になれる錦繪に、彰義隊の岡十兵衛といふ士が、官兵の肩章を奪ひ取る圖あり。其圖中の肩章は實物よりも凡四五倍大に描かれたるが、是はいはゆる繪空事なり。(續く)



僕のこれのロ

太田隆彦

こゝに掲げた二通の手紙は大晦日の夜行で東京上した隆彦君がアパート生活から旅用箱花さんに宛たものである。カフはあや美君撮影のことで、隆彦君に見せてやりたくて撮つて貰つたもの（路傍）

はじめ僕は此庭の親爺と、二階の四疊半を借りる事ゝ契約したのだが、親爺め僕の留守の間に勝手に僕の荷物を階下の六疊の間に移したから、以後一言こたわりを以てしろときつく叱つて置いた。

六疊の間に一人で寝てゐると寒くていけないから、陽のよくあたる二疊の間に變へた。この部屋は寒くない。丁度ひとりに二疊の間が暖くていい。二階の四疊半もあいてゐて何時かはつてもいいのだが、二階よりは階下の方が暖い。

日々の運動が充分なので身体は健康、目方もだいぶん増えたであらう。一日は一日を、殆ど加速度を伴つて色んなことが見え、聴えはじめた。小包、書物、ル・コラン、毛布、シャツ等受取りました。バターがまだあるので食パンくつたり、味噌汁のんだり、時々腹一杯なべたり。

けれどきりきりつめるだけきりつめた生活してゐる。着いた日直ぐ、武谷さんの奥さんと市内を見物したのと、市電で徒歩でよく歩くので、市内は殆ど何處を何うまごつくところもなく、よく案内はわかつた。大阪で發つ時に借金拂ひをしたのと、こちらへ来て靴の修繕、市電、郊外、食事、風呂、下駄、万年筆紙、色々買ったので、金はなくなつて仕舞つた。澤山持つても少く持つても、持つただけは必ず持つて仕舞ふから、金はなるべく少く送つて貰ふ。いちど決めたのであるから、この一年、二年、三年必ず決めた方向に僕は進む。石黒さんが例になつては堪らないが、なるべく無理のない様に、ゆつくり自然にゆきたいと思つてゐる。先日奥さんと病院へ見舞に行つたところ、武谷さんが、大阪の（これに類する力をこめて）商大の高商ぐらひでは駄目、それに金のないスカンピンでは駄目、カブツがなくては駄目、何をいつてやがるんだ病人ども、俺の胸にねむる雄大な意圖を奴等に語るも勿体ない。

いま一番心配するのはソロのことで、煤けてくろくなつてゐるのではないかと心配する。猫を洗濯して呉れる様に、ふとんは送つて貰ふまい。いまある毛布、洋服、レインコート、外套、ネマキ等で充分暖いからこの上何も要らない。小野さんに御禮云つて貰ひたい。林武氏にあつてそれから、獨立美術展の人々の畫集を見て大變嬉しかつた。ヴァイオリンがそばにないと両手を失つた様に寂しい。ケースは押入にある。樂器が

あると仕事もはかどり、勉強も出来、頭も益々清々するのだが、来る時矢張りシャツに包んで、靴の底に入れて来るべきであつた生活は常に音楽とともになくてはならぬ。そんな形で僕の今後の生活が變つて行かうと、僕はもう文字とは別れたのだから、そして僕の存在そのものが音楽なのだから、矢張り樂器がひとつなくてはならない。こんなことは母親には通じないが、わかる苦だと思ふのである。

スーちゃんや、紅葉の木や、猫や、おばあさんや、松の木は皆んなひとつノアの箱船だと思つてゐるのだが。

大阪の玩具箱が東京の玩具箱になつたこのまゝ、こゝとはいつまでつかうか。

もう、こゝで、あつさり會社止して、此地に來てもいい筈である。家は二階建て、八圓から十五六圓いくらもある。商賣の方法もあり、働くすべもある。困れば困つた時のこと、僕達より困つてゐる連中もいくらでもある。時あつて、困る家族のそのひとつであつてもいい筈である。病人のない限りはいまのところ案する程のこともしないままで通りに、このまゝで一番よろしい。昔おばあさんは今治から大阪へ來たといふ。もう長い旅はできまいか。

おばあさんに云つて下さい、降は陽のあたる温室の様ない、部屋で、いつも元氣だと、目方もふえたかも知れぬ。おばあさんがくれた小い本よんでゐる。寝る前にいつもお母さんのこと、おばあさんのこと、親猫、仔猫、ソ

口のことか心配で仕方がない。寫真でも見
たくなつてくる。

愛の塊、僕のれこッロさんを大切に。

一月廿日

隆彦

母上様

手紙、小荷物ありがたう。

昨夜から今朝へかけて寒くて寝られな
く少し気が減りかけてゐたところ、思はぬ
荷物が届けられて大變うれしかった。雨の日
の靴送つて貰はうかと思つてゐたところだ
つたので喜んでゐる。

仔猫が澤山生れたら一匹だけ残して残り
は生れたその時直ぐ姫松通を西へすつと一
町半許り行つた處の河へ投げ込んでしまふ
こと、一匹だけは残して置きませう。何時萬
一のことがないとも限らないから。

おばあさんの身体が不自由ではお祖母さ
んもつらいし、お母さんも困ることだらふな
博ちやんが承知なら來て貰つた方がいゝだ
らふ、今のところお互に身体が大切だから。

來栖さんへは一度行つたが、皆んな留守だ
つたので直ぐ歸つて二度目は子供が二人あ
つたので一緒に遊んで食事してゐたら、夫人と
お嬢さんが歸つて來た。夜會があるとかで主
人は留守、夫人とお嬢さんは直ぐまた出掛け
た。僕はストローにあたり乍ら一番小さいベヤ
ちやんを膝に堆せて繪の本を讀んでゐた。僕
は小供の繪の本に對する面白き熱心さ、子供
とおなじだからごの瞬間も大變楽しい深い
印象を享ける。

繪の些細な部分まで、筆に繪に顯はれてゐ
る限りこれは聯隊長、これは中隊長、これは
二等卒、よく判明と覺えてゐるのに驚いた。
間違ふと眞ぐ指さして了ふ。その上は、リ
ヨウちやん夜れる前に竹刀を盛んに振つて
ゐた。

こやつも牛若丸の一匹か、姉は先刻云つた
通り母親にひつばられて夜會に行く年頃の
娘、可愛そうに、住子のやうに霜焼こして
ゐないが何故か可愛さうな氣がしてならな
かつた。れうちだけの金貨を拂ふ男の見付か
らぬうちにゴールドミスにならない様に要
らぬ心配してやつた。

冬だのに水着に近い黒い服きて夫人の体
格は堂々たるものだ大變氣持がよろしい。
一度午前中暇なとき、僕も暇なとき、主人と
悠くり話すつもり、話は一度で済む、一度會
へば相手の全生涯を見透してしまふ。

あとは、あつてもなくてもいい、機なことが
昨日のまゝにつづくこの退屈さ。

充分心構へは怠つてはゐないつもり、先々
の僕の仕事に於ける金の問題、僕がさばると
木の葉もその場で金貨になる、れげどつたら
ないもの程とふとい。つまらないものゝ聲さ
その満ち溢れた水や日光の祝福のうちに、凡
々たる日常生活の重荷が、僕には少くも重荷
でない。一日一日がその日の音楽。

この世にひとつしかない浪費、壊しながら
育て、ゆく自然のまゝの音楽、この音楽を生
命の焰を絶やさない爲に、人の忍び得る限り
の苦勞はする。馬も四つ足鹿も四つ足、す

でに凡ゆる神々との戦ひに於て、諸國民の主
である自分が、不斷の屈辱に耐えられるだけ
耐えてゐる。小學校の運動會で飛び超えたと
つきつき背をまるくして、次の子供がとぶ遊
び、一日一日起きた時はネンネで寝る時は老
人、唯一人部屋に居るのは楽しいことだ。

お互がもつと孤獨であれば却つて愛は深
いだらふと思ふ。武谷さんへ二度行つた。主
人夫人の喋ることだまつて聴いてゐる。可愛
い夫婦、なんことぬかせ、俺は水入らずの
邪寛はせぬ。心の中で小さいあしぶきを吹き乍
ら大人ども愚かしさをいつも笑つてゐる。彼
等は踊る、僕はリンゴを持つてゐる。ソロが
ある。住子がある。祖母がある。母がある。
陽の光がある。水がある。

部屋また變へてやつた。こんどは三疊、そ
して六圓野球なら二疊から三疊へ見事な盜
塁、ホーム、イン、セーフ、いつのことやら
僕は知らん。僕は日本人の監督、僕が生きて
る限りはこの國に光と希望と星がある。

バルザックがフランス人を理解してた様
に日本人をよく理解してゐるのは僕が一人だ
け、奴等には自分、あつても愛がない、みな
いそ／＼と穴をさがす、ソロのやうに生れた
まゝの着物が肌で、肌が着物でまるまるその
まゝの生れたまゝに悠々として寝たり起き
たり鼻の向いた方向にしか動かず、腹がへつ
たら催促するのが一番よろしい。

要らんこと澤山云ひましたごめんさい。

一月二十七日

隆彦

母上様

斷章

川柳を考へる

松丘町二

定型非定型

雀郎氏に「十七字の惧れ」といふ自由律俳人に與へた文章があつて、當時甚だ感心して讀んだ。氏の論旨は、大變明快で、十七字定型を韻律美から肯定して定型を破りさへすれば新しいのだと思ひ込んでゐる新傾向作家達の、蒙を啓いたものだつたと記憶するが、私もまた、十七字定型を韻律美から肯定して、しかも尙定型でなければ川柳でないと思ひ込んでゐる人々へ「十七字の惧れ」を説かうと思ふ。同じく十七字の惧れであつても雀郎氏のは、十七字の惧るべからざる理由の説明だつたし、私のは、十七字の時

に惧るべき理由の説明であるから、盾ならばその兩面に相當する——こゝに單に十七字といふのは五、七、五の定型律を基調とする十七音字を意味するので、同じく總音數が十七であつても、發想法が定型でないもの、例へば即氏の

月光に添へて雨瀟々と降れ

の如きは自由律として扱ふ。

さて、川柳に於ても俳句に於ても五、七、五の定型律は誠に美しい。なだらかで、ぴんと張つた律動美は、誦する人の快感を購ふに十分である。その複雑さから云へば五、七、五、七、七の短歌律の方が、遙かに外在律的に完成されたものであり、その波の起伏に微妙さと變化の美を多分に持つてゐるが、この短歌律から派生した五、七、五音定型は、これだけで一種の完成律をなすためには、そのリズムの波は、必然的に銳角的であり、躍動的である。單純であり、急調であるこの定型の持つリズムの美は、決して否定することの出来ない力を持つてゐる。そしてこの定型律美は定型自身の性質として備へてゐる個有のものである。即ち

定型は一個獨立した韻律美を持つのだ。試みにこの定型へ、手當り次第の言葉を持つてきて、あてはめて誦して見る。

紫の雪が降るなり夏の家

電車から波を蹴立て、紙屑屋

この意味をなさない一聯の言葉であるに拘らず、尙そこに一種の律動美が感ぜられやう。この律動美が五、七、五音定型のもつ個性なのだ。生れながらにして持つ天稟の美なのだ。この定型へ、選ばれた言葉が、一分のすきもなくあてはめられて、定型自身の持つ韻律美と、言葉のもつ韻律美が、渾然として致するとき、初めて定型律は完成の美を發揮する。よき川柳の誕生である。

だが、我々の生活を決定するものは現代の社會機構であり、我々の魂に響きくるものは、現代文化の種々相である。川柳が、若し、我々の生活を反映する一つの呼吸とするならば、我々が現代に生きて呼吸してゐる通り、彼も亦現代に生きた呼吸をせなければならぬ。我々はいつとも規則正しい呼吸を望むのであるが、現代の社會相は、決して我々に安穩整調

の呼吸のみを許しては呉れない。時に急迫し、時に遅緩する。初から決定された五、七、五といふ整然たる呼吸を繰返すことは、生理的には健康のために結構であるが、心理的には、時に甚だ窮屈である。不自然である。與へられた定型に、我々は屢々言葉をゆがめはしないか。定型の持つ個定美と、言葉の美とが融和した時こそ、定型律は、閑然するところなく美しいが、若しその兩者の間に隙のある場合には、即ち定型にのつてない定型句の場合には、水と油との混和の如く、混沌として濁るのである。我々は無理に我々の言葉を定型にゆがめて、定型と言葉のギャップを作り、ギャップの吐く混濁液に堪えなければならぬ必要はない。こゝに自由律の登場——俳句に於ては二十十年の昔に、短歌に於てはこゝ數年前から——がある。

自由律句とは、我々の川柳の呼吸が定型にふさはしからぬときは、定型に歪めないで、自由に呼吸するその呼吸の結果を意味する。定型にまで伸ばしたり縮めたりしてこねまはさないで、在るがまゝに、あるがまゝのリズムで歌はうといふのだ。辨當箱にきつちりとつめた定型の飯を食ふのも食事だが、茶碗についだ不定型の飯を食ふのも、等しく食事なのだどつちがうまいかなんてことは愚問として、自由律なるものは、自由なるが故に定型律以上の自制を必要とする。たとへば世上に汨濫する定型律川柳の凡句は、定型のもつ個定美をも、自分の言葉の持つ美しさだと思ひ込んで、練磨の苦を怠る誤謬に由來する。作者も選者も定型の個定美にだまされてゐるのだ。

淋しさは妥協に生きて自我がなしこれは御覽の通りつまらぬ句だが五、七、五に配置されてあるために、然りたゞそのことのために、何か詩としてのリズムがあるやうに思はれ易いのだ。定型律川柳の佳句とは、空氣のやうなものだ空氣は一個の化合物かなんかのやうに考へられるが、全く性質の異つた數種の瓦斯の混合物で、分離すれば、酸素はやはり酸素であり、窒素はやはり窒素であるやうに、定型律川柳も亦、定型美と言語美との、二つのものゝ二重奏に外ならぬそれが佳句に於ては、二つのものゝやうに見えぬのは、空氣のやうにびつたりと板についてゐるからだ。自由律川柳に於ては、このやうに人々の頭に、それと氣づかないほど普遍化されてゐる定型美の力を借らないだけ、失敗の作は歴然として失敗するのだ。眞の自由律の作品は、決して人々が考へてゐるやうに、間のびしたりぢぢかんだり、散文の切れ端みたいに索莫たるものではなくて——そんなのは定型で歌へるものを、わざ／＼無定型にしたか、本質そのものが川柳詩とならぬものを川柳にしたか、どつちかだ——そのリズムは躍動的で、堅密で、渾然として生きてゐるのだ。

にしても表現することが出来なかつたのだ。私の心理的リアリズムは、定型を退けて、自由律の呼吸をすることによつて初めてこれらの句を成した。

だが、と人々は云はう。だが、定型を奉じて想を練り、言葉を選び、深く定型のうちに沈潜して、定型に苦しみ、然して定型律の句を生む努力こそ、川柳作家の本懐であり、意義がある。定型を離れて川柳は存在しない。定型が不便だと云つて、直に自由律に走る者は、川柳への認識不足を示す以外の何物でもない——といった意味の反駁は、私と雖も豫想してゐる。

だが、と私は答へたい。川柳の歴史を知るものにとつては、川柳の本質が最初から五、七、五の定型を持つて生れたものではなく、遠く淵源は短歌にあり、繼歌——連歌——俳諧と經て、最後に五、七、五、七、七の前句附から勝手に獨立したものであり、且現在でも七、七の十四音形式が川柳として許されてゐるので短歌定型の如く、三千年の間ゆるぎなく

その形式を傳承してきてゐるものと、同日の論ではない。即ち川柳の五、七、五の形式には、定型としての獨自性と不動性が稀薄なのだ。加ふるに俳句の如く、切字の制約や、季感のやかましいおきてがない。その内容が、奔放自在の自由さをとりうるものが、川柳の一大特色として認められてゐて、形式にのみ定型を、それも不確性の——固守する必要はないのである。

「武玉川初篇研究」 疑義二三

寺 川 信

「武玉川」は、座右愛讀書の一つで、可成以前から、讀書執筆に疲れた時に、句々を拾ひ讀して獨り楽しんでゐるので、本誌連載の柳壇三名家の「武玉川初篇研究」は特別敬讀してゐるわけである。二月號所載の分で、一二疑義が生じたので

ひとり日の中に微笑を編める編棒
この句の素材は既に既に定型川柳に於て、歌ひつくされたものであるが、自由律の表現をとることに依つて、一つの新しい内容に生かし得たと云ひ得ると思ふ

定型律川柳の美は十分に正しくこれを認めるが、自由律川柳の美も亦十分に正しくこれを認めたい。——これが私の云はうとした全部である。

不學を顧みず、盲蛇言を聞て頂き、重ねて御示教を得れば幸甚である。

這ふ子の口に人形の舟
「丹」の誤讀として解釋を進めて居られるが、私は依然「舟」ではないかと思ふそれは、雛祭の始原である處の、上巳祓

——三月上の巳の日に水邊にてはらひをするところが、平安朝頃の一つの行事になつてゐて、源氏物語の須磨の巻にも、源氏の君が流謫さるゝのが三月朔、巳の日に當るといふので陰陽師を召され、祓をされたといふ記事がある。その祓に使用されるのが、あまがつ、即ちあまが、こであるこれを祭り自分の凶事を負はせ、舟に乗せて流すのである。後世はふこを三歳までの幼児の玩具にすると、災厄を除くおまじないになると稱したもので、これ等も上巳祓から轉化した傳承であるらしい斯うした典據を念頭に置いて、眼前に嬰兒が人形（玩具）の舟をなめるか、口にくはへるとかしてゐる景情を、この句の作者は興味を感じ、更に進んで「この子も彼の上巳の祓のはふこの如に、種々の辛酸を背負され、人生の荒海へ扁舟に乗せられて漂ひ行くやうに、やがて、押し出されることであらう」と心ひそかに愛憐の想をよせ、この複雑な情緒を此一句にまとめ上げたのではなからうか、殊に點者慶紀逸が典據故事等に特に興味を持

つ其角系江戸座の俳諧師であるだけに、こんな想像もおもひ描かしめるのである
更行春に禿苦になる

この禿も太夫の雛でなしに、六波羅禿としての解釋も成立するらしく思はれる即ち、彼の平清盛が、自己のグーデターに少し氣がさして、洛中に三百人の青年を放つて、自己及び平氏一門を誹謗するを探索せしめて、嚴刑を加へた——あの六波羅禿、赤い直垂を制服にしてゐたので、赤禿とも稱したもの。この連中が虎の威をかる狐で、小役根性をサラケ出し、可成横暴振を發揮し、弱いもの苛めをやるので、都人の苦の種であつた。春は更け行き洛中洛外、今將に行樂の時である。然るに何處へ行つても、うるさい——のみならず一つ間違へば生命に係る彼の嫌忌すべき禿が横行してゐる。——のが頭痛だ。といふ。當時の京都の民衆の心境を描寫したものはあるまいか。

はげしい親の叫そこない

この句では、アミチスの「クオレ」のなかにある、一挿話「少年筆耕」を聯想

さゝれる。即ち、叱られた息子は死なない場合、毎夜夜遊が過ると思つて、親が厳しく叱ると、實は寺子屋時代、又は武術指南所同門の友達の家が、貧しく其老母（父でもよい）が病、且夕に迫るといふやうな場合、毎日家を脱けて出て、その友達の家之内職が其他の手傳に行く、と云つた劇的スチュエーションが想像されるのである。この方が「はげしい」がよく利くやうに考へられる。

以上、何れも淺黄裳な曲解か知れないが、こんな風に句意を推定し得るといふ愚見を開陳したまでである。

（八・二・一四）

（五十頁より續く）

背景と共に、少年の心をキャッチした見世物の一つであらう。それは小さな人形が皆な動く仕掛けがあるからだ。

明治末期から大正を通じて、河内音頭や江州音頭の本場となつてゐた。東家力太郎などもツイ最近まで其の名を連れてゐたが、一と頃は三五郎が牛耳つてゐたらしい。大阪の一錢屋を語る上に、この席も又、閑却することを許されない程密接な歴史を持つ。

殊に「一錢屋」の時代的進出が今日の十錢均一の萬歳にあるなれば、昭和の今日に於ても其の俤を遺して尙ほもお客の頷を解かしめてゐるのも懐しい氣がする。

木村晃卓



アルプス嵐から

石曾根民郎

の句を口吟むとき感慨の切實さをおぼえざるを得ない。

死を想ふ日にしきりなる雲去來

この句を君のものせる句として詠んでこそ、光りがあり強さがあり嚴そかさがあるべき筈である。

○

○

別府の湯煙は絶えぬのに
遂に君の息は永久に絶えて
しまった。何時であつたか
別府百景の繪端書の隅に
死に場所にくゝもよいな
り海地獄
をしたゝめられたことが
あつたが、平素の君の病弱
の身を知つてゐるが故に、
とりとめもなく書きなぐつ
た句とは思へなかつた。あ
さはかにも死ぬといふ哲理
を解せぬ自分には、再びこ

遠隔の地に君を交友に持った私は幸福であつた。お顔も知らない。しかし川柳

同好のよしみは深き交情の念を昂からしめた。昭和六年の夏から手紙の往來は初められ、君の最後のお便りは昭和七年十月二十六日附の端書で終つてゐる。

早速御見舞を受けて禮辭延引仕候へど病氣のせいとして御寛容被下度難有御禮申上候未だ安靜中に候

あちら向きこちら向けとも秋の風
母よ妻よまだ生きて居る眼を開き

もたいなや母燈明へ背をやるめ
病床から雲の姿態の變るを見
友の死の死らせベッドの上で讀み
病床へ給料が届きはがらかさ
病床に居て給料はもつたないが私の處
へは一月も居て呉れませんか

これが鉛筆書きの、恐らく臥せつたま
の走り書きで、しかも最後のお便りとな
つたのであつた。餘程苦しい我が身に抗
してしたゝめたものであつたらう。それ
を考へると全く涙つぽくなつて來る。

○

○

九州帝大工學部に助教をつとめてゐる私の従兄に會ひに行く旁々、是非とも君に一度お目にかゝりたかつた。その機を逸してしまつた運命を今更ながらこつても仕方がない。たゞ健康の二字に縁遠かつた君が、昭和六年八月號「川柳雜誌」表紙の私の槍ヶ岳登山姿をお目にとめられ、健康そのものの如き私にあこがれてゐる由の口吻をもらしたお便りも受けてゐるが上にも、本當に心残りの多い運命とあきらめかねる。幸にして九州の

君を悼む

南國へ旅する機會があれば君の墓に額づきたい念願である。

○ ○

君の遺作となり得た「僕を語る」の小冊子を、親しく私の手で編輯したその追憶も、今こゝにしみゝ感興の深さとうつし世のせつなさと思ひ合すたねならざるはない。

君とは十才若い私が君を悼む辭の拙なさを決してしつては下さるまい。

生前の君の身體と私の身體の隔りは、死後の君の靈と私の身體とをよりよく近からしめた。私を凝視めてゐるのではあるまいかと時々思ふことすらある。

信州の風は冷たい。颯々と来る日本アルプス風に頬を濡らすとき、君の夭折を悼むこゝろで一ぱいとなる。

あゝ！晃卓君、安らかに瞑せよ。

(カットは故晃卓君)

逝きし晃卓と僕

河野夜王

僕が郷里の別府市外を出て大阪に住むようになつてまる九年であるが、其の間に僕の縁者や友人の間にはいくつかの不幸が起きたが、晃卓逝く、の報を手にした時ほど僕を落膽させたものは皆無である。晃卓逝くの報が何故に僕を落膽させたか、それは僕等の郷里に正しき川柳を擴める者は、現在彼晃卓をのぞきて他に無しと、僕は信じて居つたからである。

ひであつた事も特筆す可きである。氏の柳信にはよく僕等が大阪に屢々路郎師に會はれる事を羨まれてゐた。また先生に會つたらよろしくとか、先生にお變りありませんか等必ず書をへてあつた事は、氏が如何に路郎先生に心服してゐたか、又如何に純情の詩人であつたかと言ふ事を裏書するものである。

(勿論他にも川柳人は居るには居るが)晃卓氏は早くから川柳雜誌別府支部幹事の病弱の身を惜まず盡力してゐたのであるが、僕が氏と親交を深める様になつたのは昭和四年の暮からである。川柳のため郷里で奮闘して居られた氏の熱が僕を引つけてくれたのである。

氏の句はいま僕が取立て書がなくとも病弱の身體から一句一句と生み出した讀む人をして泣かしめねば置かない句は、誰もが知つてゐる事であらう。世にある時の氏からの贈物として短冊三葉と「僕と語る」の一冊とが永遠の紀念となつてしまつた。

廻れ右と世を見ればうらゝかき 晃卓の短冊は僕の生あるかぎり、僕の貧しい書齋の壁から、僕の川柳を視つめてゐてくれるであらう。

僕は再び書く。僕の郷里から柳人晃卓を失ひし事は永遠の痛恨事である。

「湯苔」を發行してゐたが、氏等もまた支部報「湯苔」を發行してゐたのであるが、吾々のため幾度か鞭撻の言葉を送つてくれたのは忘れられない事である。

同事に何年か後に僕が別府に歸り住む日があれば、必ず第二の晃卓として及ばず年川柳のため奮闘せむ事を地下の晃卓氏に誓つて筆を擱く。

氏であるが、また非常な先生(路郎師)思



責任

橋本緑雨選

責任をのがれた椅子がこけても
責任を果し下役はつとする
責任に只恐縮の姿なり
責任を持つと云ふのがほざれど
輕辛に言つて責任持たされる
御先祖へたゞ土臭く世を生きる
責任を感じた父の聲明書
責任のある椅子今日も空いてる
責任のある身春から病み續き
胸一つ大丈夫よと姐御振り
責任の怒と別になだめられ
責任のものか一人酔はずに居
責任を持ちます茶碗放つて見せ
責任へ吾も俺もと逃るなり
責任を忘れてゐないコッパ酒
責任を果した朝のひげを剃る
責任を最後にゑらぶものがなし
責任を果した後の心良き
責任を強く知つての丸刈も
責任のないのが一人笑つてゐ
責任へ子供ながらに詫て居る

溪鶯 愁霧 小松園 ひさし 雷兒 貴志子 阿鴻 吉祥 詩郎 戀里 葉光 鴉天 良之佑 正甫 岩石 法泉子 迷兆 進平 狂童 曉月 祥

責任は僕が負ふよと男なり
責任は死んで花輪の人となり
責任へはつきりと我が地位を知
責任を前に長男かたくなり
ほろにがき酒責任を意識して
責任を生きて人望高くなれる
責任に生きてバツト吸ひつける
責任は艦もろとも沈むなり
責任へ黙々として働いてゐる
責任の重い兄嫁とはなりぬ
責任をはたせば腹がすいてゐる
責任へ幹事の足がよく揃ひ
責任の中腰あとで呑むつもり
暇を取る程に責任感じたり
責任を負ふ事にして不安なり
責任がないぞくと言ひに来る
言葉少く責任を感じてゐる
責任の事をば言はず呑んでゐる
責任を果した後の顔の色
責任を立看板は隅に書き
責任を果した後の顔の色
責任を立看板は隅に書き

朴甫 たいを 南葉 紫雲 迂均 六郎 美津女 錦石 利生 北陽子 沒食子 紅 天痴人 春秋 新水 紫陽 壽天 遊歩 正路 幸 捐



一部を改正して、絶対に延刊のない様に致したいと思ひます。
▼募集吟の三月五日締切の「座席券」に限り三月十二日に延期致します。その他原稿の締切は従来通毎月五日厳守しますが、各地會報に限り毎月十五日日本社事務所着をもつて締切ますが、整理の都合もありなるべく早く御送りを願ひます。締切は總て厳守致しますから各原稿に就き特に御注意を願ひます。
▼東北三陸地方(三月三日拂曉)に襲來した大地震と津浪によつて多数の罹災者がある由、特に川柳家に被害のなきことを祈ります
▼奉天支部新設、御旅支部で活躍されてゐました江戸みつる君が奉天へ轉住されたのを機會に支部を新設され幹事として活躍されることになりました。同君は三月五日神戸正午うらる丸で出帆の船で渡滿されました。▼草集吟「玩具」共選伊藤愚陀君が永眠されましたので吉田水車君代選することになり

▼本號は創刊以來の始めての連刊で讀者諸氏に對して誠に申譯ありません。今後は編輯部の組織の

廻り椅子記者の一次に汗をかき
責任があつて馴染まぬ酒の味
責任の暮れの仕事へ汗をかき
責任を感じて手紙を書くとき
責任を負へと代表語寄せる
責任も金の裁きで臆りになり
責任をまぬがれて溜息をつき
責任は重く頭の低い人
責任へ父の負債の大き過ぎ
責任はいゝころにして儲けて居
責任を叱られに行く氣にもなり
責任はまだ長男に譲られず
責任の持つ示談の酒苦し
責任の歸する處も不明なり
ともかくも責任だけの返事する
責任をまもるにセコンド音高し
退職の人へ責任なすりつけ
泣いた子の連は責任ちと感じ
責任を盛じてからの氣をくばり
責任は今日かがりの机也
責任をのがれ主人に認められ
宴會が終れば幹事急に酔ひ
責任をはたしましたと目をつ

街頭

懷手夜霧の深い街に立ち
圓タクを値切つた客のこぼれさ
ピラ撒きの馴れぬ手つきは
ダンサーに會つて帽子を脱いで

沐天 白柳子 四雨 明路 菊山 秃戸 鳴鶴 孤郎 野郎 耕民 九文 銀波 柳山 吉左 方眠 美夜 三郎 風車 一柳 世都 みのる

責任の持場に少し揉めており
責任と言へば厳しい顔に見へ
責任かまたも校長首にする
佳作

責任が果せず靴がへるばかり
責任を考へすぎる懐手
責任をぬすくり合つて揉めて
責任を果してからの高射
責任の下積みになる運命よ
責任を果し短靴輕うはき
サイレンを聞いて責任ホット
責任へ出納課が灯をともし
盃を重ね責任忘れてる
責任に男は霜を踏んで行き
人位

責任へ夕陽を浴びてから戻り
責任は寒さに負けず歸つて來
責任を忘れ左傾の群に入り
地位

責任の急いで下りる段梯子
責任をはたしたと云ふ長い風呂
天位

松丘町 一選

街頭の女性眼鏡をかけてゐる
日蓮の太鼓の響く街凍る
街頭の娘らのすから春が来る
炭の粉の迷はされたる街の角
春秋 青兒 詩郎 朴甫

いの助 夢人 柳人 紅人 鯉友 青兒 紫石 水車 北陽 白蝶 白峯 新水 一笑 玉兒 裕秋 天痴人

ましたから御諒承なふ。

▼八東支部(島根縣)が新設されました。A B C 吟社の同人であつた平塚亂笑君を幹事として元松江支部幹事の廣江天痴人君が後見役として活躍される事になりました。三月九日夜創立句會と懇親會を開かれる豫定だそうです。

▼同人朝田新水君は去る二月三日夜、岩本素人君、媒酌で舊社友近藤テル君、令妹と華燭の典を挙げられました。お喜び申し上げます。

▼同人安井ひろし君は来る四月三日、先妻の令妹と華燭の典を挙げられることになりました。お喜び申し上げます。

▼同人太田朝陽君は福岡へ歸へられてから音信がながつたが最近病氣快復と共に川柳も大いに作ると云つて來られました。

▲社友水谷鮎美君は天野ト居と同伴で二月七日姫路から廣島方面へ旅行されました。

▼神戸支部の創立十週年記念句會を二月四日夜神戸八宮神社で催されました。當夜本社から路郎先生、萬よし、亂耽、紳樂、二南、かはる、水車、鶴峰、夕鐘、鮎美、變人、豆秋の諸君と私が出席致しました。歸途路郎先生、萬よし、かはる、紳樂と私が新開地から夜半阪神國道をドライブして大阪道頓堀、萬よし亭まで着きました。向この句會へ大阪から白柳子、一笑、ト居、晴夫の諸君も出席されました。(會報御參照下さい)

▼首藤竹楓君が今回社友として入社されました。今後の活躍を期待してゐます。

▼釜ヶ池支部では川柳短冊展を二月十二、十

鐵縁の女に街頭寒くなし
街頭へ出た後朝の腹がへり
社長室街頭の風窓を打ち
街頭の雨郷愁の歩きぶり
街頭へビルの温さをふりすて
街頭の君とわたしへ春の柄
交又點白く流れしビルデング
街頭のホコリ老舗は靜かなり
街頭に犬が一匹うろたへて
先を行く街の女を疑うて
街頭を俺は迷うて歩んでた
街頭へ出れば女の友が居る
街頭の聲も青年巡査たり
街頭の風に悲しく鳴る笛子
街頭の夕刊賣へ灯がともし
街頭に靴を磨いて生きるなり
街頭に新婦らしい二人なり
街頭へ唯あこがれし春の娘よ
街頭の春ニセ紙幣が散つてゐる
街頭へ父茫然としてゐるなり
街頭で久々逢へば兒を亡くし
ひきめつめたく街頭に佇む黒き女
月蒼白く街頭に人の子酔ひ痴れ
林立のビルに夜寒を感じたり
ダイサリの靴にかかとが前を行く
辻占にどちらの戀も凶と出る
洋服屋のコーヒ苦く宵を出る
街頭に吹かるゝ我と紙屑と
動いておらねばならぬ街頭

今雨 春光 富美三 孤鶴 鐵吉 白花子 耕民 湖山 新水 夢人 曉童 迷兆 法泉子 紫陽 美津女 六郎 迂均 白峯 武夫 晴夫 同 三郎 同 騎 同 鴉 同

街頭は寒し小春のひるひな
街頭の溜息となる支那手品
街頭に風鳴り鼠の死骸かも
街頭にふらふらとて風に驚く
飲む金もなし街頭に吹く風や
ビラを讀みつくして電車來る
街頭へ一尺出張る板團ひ
電柱の蔭まだ寒い後ろむき
雑音が生む街頭のニュースにて
音もなき雨街頭を春にする
街頭の陽と開つて小商人
霜街頭につばらに降りる
限りなき鋪道にパンをうる足
秋はさみしい街路にすす日流
生きる悲哀が街頭への進出
街頭になんにも落ちてなかり
街頭に處女の目なりし装ひよ
寒行の足が蹟ぐアスファルト
大阪の最ん中にある水溜り
街の風真正面から吹きつける
社會鍋に街頭の土埃だ
進め／＼街頭の燈臺は青
叫ぶべく深窓の美女街頭へ
不申斐ない心へネオンまた
職を求めて歩いて焚火にあたる
枯葉が落ちる街をぶらぶら歩く
街頭の哀愁風と青いビラ
街頭のミッドウインター 神を呼ぶころ

柳人 噴兒 同 同 白柳子 同 同 荷平 同 同 慕秋 同 同 洋々 同 同 紅 同 同 比左夫 同 同 明珠 同 同 天痴人 同

三の兩日に開催されました。出品は百數十點を集めてプリントなどを發行してなかくの盛會であつた。川柳短冊展と兼ねた記念句會を催され本社から鮎美、鶴峰、機見女、卜居諸君と私が出席記念撮影もあつて句會も盛會でありました。幹事の勞を特に謝します。
(會報御参照下さい)
▼加古御支部の幹事水田光哉君は、支部の都合で宮田泰山君と交替される事になりました。幹事を辭された光哉君後見役として一層活躍される事になつてゐます。光哉君は加古川町で發行してゐる愛報新聞へ柳壇を設け三月十日締切題は骨、店員で募集されました
▼社友石曾根民郎君は(松本市)四月頃京都方面へ見物に來られる由、またお目にかゝれる事を喜んでゐます。
▼社友日野華水君は二月十一日城崎温泉へスキーに行かれて雪は一〇〇センチ 天候は晴れて好スキーだと繪葉書を寄せられました。雪解けの音城崎の夜が明ける華水の句
▼清水盧白君は一月廿九日南部へ觀梅と道成寺へ參拜されました。一清姫に似た年頃と汽車に乗り盧白の句
▼今里支部の創立句會の事で二月廿四日夜西木朴甫君の宅で、打合せ會を開かれました
▼近藤鈴子坊君は流行性感冒にかゝり療養中急性肺炎が併發して二月十二日午前二時三十五分永眠されました。享年五十七歳、十九日午後一時より二時まで、東京四ツ谷寺町西念寺に於て告別式を執行されました。哀悼の意を表します。
▼伊上凡骨君は木版彫刻家として有名な方でもあり、柳界でも馴染の多い方が多數あり

街頭！一九三三年がゆがんでゐる
はつきりしたまへこは街頭で
松江は昔くさい街頭でヘルン。夢
街頭で僕だけが見つけた春
赤い服それも目立たぬ街の膚
ウインドへ真冬の風のあるは
街の譜の端役に氣づく社の歸り
アスファルト姉の友から會釋

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

玩具

水車選

童謡も交ぜて玩具の賣れること
姉の子を借りて玩具を買はさ
歩の一ツ玩具になつて見
賃仕事未製の玩具子は貰ひ
兩刀でひんやり父の首を切り
おもちゃとも言へぬ値段で目
玩具屋も第一線のものばかり
本物も玩具と出来ブルジョア
兵隊になつて玩具出て行く子
謂具にも家財道具が皆揃ひ
背の子の玩具が廻る春の風
こわされて父はうれしい玩具
玩具屋をよしくくと肩車
母の眼に美しい玩具がこわれ
借金と別に玩具を買つて来る
玩具店元祿明治昭和あり
枕頭に玩具列らべて疹癩の兒
玩具から離れる頃を憎まれる

貴志子 玉兒 吉祥 阿鴻 吉左右 遊歩 湖山 三郎 曉郎 詩郎 紅生 利生 葉光 今雨 浚子 良之 柳秀人

上吉 野田 水車 共選

玩具でも持たして置けとうる
いろ／＼な玩具へ寫眞氣が波れ
歸省して叔父と呼ばる玩具買ひ
アメリカの玩具届いたクリスマス
放り出した玩具を拾ふ御用聞き
坊つちやんの古い玩具を頂戴し
浮かす物持つて子供と湯に出
一つ買ひ一つ貰らつて玩具箱
ネジかけて玩具忙はしき女店員
玩具にも時代々々の色を見せ
玩具の國で子らの詩感が満足
玩具より何より乳房いつちよし
泣きやまぬ子へ玩具の忙しき
砂山に玩具が一つ忘れられ
人形に添ひねしたまゝ寝られ
人形一ツ落す射的に夜を更し
(佳)叱らる玩具を探す母の留守
(同)薄給へ動く玩具をあきら
(同)玩具一ツ貰ひ隣へ親しめる

進平 迷兆 法泉子 幸秋 春丘 白士 同山 菊路 天痴人 英賀夫 波樓 野郎 耕民 沐天 柳路 明珠 勝二

ましたが一月廿九日 東京で永眠されました
哀悼の意を表します。
▼社友廣江天痴人君の祖父 三月二日午後七
時半永眠されました。酒好きな祖父でしたそ
うです。哀悼の意を表します。
▼三木一選君昨年十月廿日郷里八幡で 永眠
されたので造幣局内 大阪川柳研究會の主
催で二月廿五日夜追悼會を催されました。
▼高知支部の句會から(二月廿二日)寄せ書
を届けられました。関秀作家も混じつて賑や
かな句會でした。
▼帆倉川柳會(高知)の主催で二月五日水府
蝶二の兩君が觀光されたのか機會に 歡迎會
を催されました。
▼川柳三又「石川縣津幡川柳會から創刊號
を發行されました。
▼川柳「醍醐」は廢刊されました。
▼川柳「紅椿」は清水光風君が主幹で 活躍さ
れてゐましたが廢刊されるそうです。
▼本號の編輯は路郎先生、町二、琴人、山雨
樓の諸君と私とで本社並びに琴人居で致し
ました。

移轉と改號

▼西村明珠君は神戸兵庫區七番町四五へ▼
矢野錦浪君(谷孫心) 東京市麴町區飯田町三
ノ二〇▼江戸みつる君は奉天千代田通三七
寺内洋行内へ▼福田鶴峰君は 大阪市天王寺
區北河堀町六九へ▼金泉萬樂君は 尼崎市東
櫻木町四二番地へ▼上村壽夫君は 高知市小
高坂新屋敷六二〇へ▼長谷川晶彦君は 秋彦
▼今荷千君は荷平と何れも改號

(同)折紙の鶴に満足してゐる子よ
(同)玩具の手ゆるむ乳房のぬき
(同)生さぬ仲最初は玩具を買ひ
(同)日曜をせめて玩具になつて
(軸)玩具フト母の居る氣付き

錦 水選

すねた子に玩具選ぶの骨が折れ
子が出来てからは玩具へ目が
想出を玩具並べて母語り
子守唄寝かせる迄の玩具持ち
子澤山一つの玩具さうし
里歸り棚の玩具のさびしすぎ
白粉も玩具になつて女の子
乗り飽きし玩具の馬は雨曝し
音のする玩具へにつこり笑ひ
玩具さへ買つてやれない生活
庭先のおもちや嵐へはつとかれ
人形がおさない母の手に抱かれ
買つて来た當座玩具を抱き寝
ガラ／＼で泣きやまないを持
泣きやまぬ子へ玩具の忙しさ
電熱の玩具へ一家の總動員
結局は玩具にされたことになり
すぐ壊す玩具は安いのにしとき
玩具とはなつて姿のつがなし
轉んでる玩具記念のようになり
人形に添寝したまゝ寝てしま
人形に何か言つてゐる戀心
男性の玩具にされて生きてゐる

芳岸 錦石 新水 吉祥 水車 白蝶 愁霧 新水 方眠 美夜路 三郎 鯉友 鯉菊 風車 遊歩 溪鶯 英賀夫 一波樓 鳴鶴 野郎 鐵吉 南葉 耕民 九文錢 銀波

創造心玩具懷しては懷し
手のぬけた人形寝かせて淋し
捨てられた玩具の心理誰が知る
玩具買ふ今俸せな母になり
す々持つて幸福さうな子の寢息
鐵兜だけで不服は機關銃
玩具も買ひたし母の運ぶ針

これはない玩具を子等は飽き
大衆へおもちやのラッパ吹く男
逝きし兒の玩具へ妻の愚痴つき
不機嫌へ張子の虎が首をふる
玩具にも時代々々の色を見せ
兒の寢呼吸玩具をそつと枕元
贅澤がしたき玩具に成つて居る
一つづつ玩具こわして成長し
愛孫に玩具の土産里の母
こわされて父は嬉しい玩具なり
こうすれば好く玩具を子が教へ
玩具箱あけて我が子の癖を賞め
玩具こわして坊の上氣嫌
首のない人形へさすが女の子
ありつたけの玩具並に死んだ
玩具店戦時氣分をたよわせた
つぶされて居るキュービー笑
オチに玩具もらつて好伯伯母
玩具でも持たして置けと居る
たゞ玩具に母を忘れ始めて居
玩具ではもうだまされぬ年々
飯事へ手のない人形出して来る

湖山 吉左右 正路 勝二 いわを 水車 幸捐 四五磨 春秋 紫石 明路 菊美 三秀 六郎 笛秀 利生 阿鴻 春光 鴉天 富士雄 夢人 夢童 芳崖 壽夫 進平 迷作 法泉子 武夫

汽車便の玩具がとく誕生日
珍らしい玩具へ大人も来て遊び
人形を一つ落し射的の灯
片足を取つたその手で抱いて
明日うれし父に玩具がひろげ
泣きぬれて玩具の中へ寝てしま
子のダンス玩具のピアノ弾い
玩具の手ゆるむ乳房のぬきさ

満足玩具のぬきは遠者な兒
自動車ぬき巻いてゐる巻煙草
一人言云つて玩具へ子は遊び
キュービーを握る子の寢息
幼稚園玩具が皆んな備つて
童心のフット玩具を買つて来る
曉の静間を鳴らす子のラッパ
散けてる玩具に妻の氣が強い
五歳ですと買つた玩具へ智恵
春街玩具の目立つ店があり
松の内玩具は四ツ程ふへる

五 客

白峰 洋天 沐天 小松園 治郎 白柳子 迂均 錦石 紅光 葉陽 紫兒 青兒 天痴人 柳人 同祥 北陽子 今雨 同雨 溪鶯 美津女 今雨 洋々 白丘土 狂兒 玉兒 美津女

千日前今昔史 (六)

木村半文 錢

(11) 海女・江州、河内音頭

千日前一帯に秋風が立ち初めて、そゝる歩きの夕なごに、少し肌寒を感じる頃になると必ず顔を見せに來たのは海女であつた。恰度道頓堀の橋桁に初霜が降りると、遙々廣島から出向いて來る牡蠣船の年中行事と軌を一にしてゐた。

今日の青年諸君には海女は恐らく理解できまいと思ふ。諸君は歌麿の錦繪海女の鮑探りを見たであらう。紅い湯巻一枚で、赤裸の婦女が、長い黒髪を蛇のやうにくねらせて深海中に泳いでゐる彼の一種エロともグロとも判別に苦しむが如き光景を。恰度あれと似た水中藝を行ふのが、海女の一行だつたのだ。と言うと諸君は必ず怪奇の、そして獵奇的な心のときめきを感じるに相違ない。事は、左様に、それはエロとグロとの交錯した特殊な興行だつたのだ。

この海女の一行が、なぜ肌寒を感じる頃になると必ず興行に來るかと言うと、實は寒い時だから興行價值が高められるので、若し、夏の暑い時分なれば今日で言ふ海水浴と同じやうに、海女の水中飛込みは良い氣持であらうが、その飛沫を受けにわざ／＼木戸錢を拂ふ馬鹿も珍なからう道理ではないか——。だから寒くならうとする頃を見計らつて遠征して來るのだ。

海女は此の期間以外は、何を營業として渡世してゐるか知らない。或は江州音頭や河内音頭の踊り子の中で、特に此の期間だけを海女に早變りするのもかも知れないが、何れにしても、若い娘の興行としては、随分思ひ切つた演技でもあつたのだ。

表看板には勿論肉體のふくよかな裸女が、水中を潜るエロ繪が、挑発的な色彩で描かれてゐた。赤い湯巻と、白い肉體と、そして

黒髪とが、さまざまの曲線を展開して、昔の危な繪に見るが如きキッドサを彷彿させた。

そして、表に面したところには、浴衣一枚で、皮膚も露はな海女たちが、肉感的な姿態を惜しげもなく曝らしてゐた。特に海女の一行は豐滿な肉體の所有主が多かつた。年齢が廿歳前後から三十二三歳の、謂はゞ女盛りの者が多かつた。故に、その興行が如何にエロ氣横溢であるかは、推知することが出來得やう。

表には長さ約二間、幅四五尺位の水槽がある。是は海女が飛び込んで、舞臺下を潜りぬけて舞臺の槽へ出現するところの出發點である。と同時に表を通る人の注意を惹くべきプールでもあつたのだ。海女は浴衣を脱ぐと同時に、眞ッ逆さまに此のプールに飛び込み飛沫を上げて河童の藝當を演ずるのだ。

試みに思へ。

紅い湯巻一枚の裸女が、澄みきつたプールの中で、圓い乳も、ふくよかな臀部も、さては兩腕も、兩脚も、その一切を露出して様々の曲線美を發揮する時、恍惚として斯の魅惑に跳め入る見物の眸の動きを。――

恐らく深い溜息と共に、水中の天女に心から讃嘆の聲を惜しまなかつたであらう。

と、筆者は今でも考へる。

殊に水中へもぐる時には、見物は纏頭代りに銅貨や銀貨を水中に投げ入れる。海女は一齊に嬉々として水中にもぐり其の金を手にし又は口中に含んで現れる。見物は酔ふた如くヤンヤンである。勿論其の金は拾つた海女の所得である。恐らく海女に對する蟲屋客は、この投錢によつて其の存在を強調したものであらうと信ずる。

筆者は少年時代であつたから、豊艷無比の裸體美を涵喫することは不可能だつたが、然し、水中に潜る女の線の美しかつたことは今も尙ほ記憶する。殊に、日傘を片手にさしてしやなり／＼と水中を泳ぎ廻つた(立泳)光景と、水中から出た海女の肉體が眞赤に色彩を呈してゐたのを忘れることが出来な

い。

現在の法規では勿論斯うしたエロ氣は認可されないことは分り切つてゐるが、然し今から二十何年か以前には斯うした興行も千日前の胴真ン中で公然と許されてゐたのであるから、隔世の感がある。

尤も、筆者の父などの談話によると、明治初年頃には随分と如何はしい興行物があつたらしく、中にも戎神社の毎年の祭禮には必

ずやつて來た「吹け吹け」と言つた女陰公開の見世物等は其の中でも出色のものだつた、と言つてゐた。それに較べると此の海女などは勿論エロと言つても幼稚園に過ぎないが、然し、今日の青年諸君には異様な感觸を與えるであらうことは申す迄でもない事だ。

江州音頭、河内音頭、名古屋萬歳などは斯の海女が去ると其の後へ掘り、海女が來ると旅に出掛けるやうだつた。

この音頭の一行もエロ氣たつぷりな興行であつて、揃ひの浴衣で四五人の若い女が舞臺に列び、音頭につれて足拍子、手拍子可笑しく踊るのだが、その間、浴衣の裾から紅いものがひら／＼して、迎も挑發的なものだつた。而も、客との視線の可なり露骨なやりとりがあつたらしく、この見物には一種の遊び人風若しくは職人タイプの色彩が濃厚だつた。従つて舞臺上の投げ錢等も多かつた。客の多くは二階で墨丸火鉢の前に眞鍮の煙管を啣へてやに下つてゐたものだ。

大正から昭和にかけて、出雲の安來節が全盛を極めて猫も杓子も唱つたものだつたが然しイヤマカオササノヤットコドツコイセーの掛け聲が歡樂地帯から行方不明になつたのは是も又時代の洗禮を受けて必然的に

驅逐されて了つたものであらう。

(12) 新内・源氏節

芦邊劇場と常盤座との中間に、細い小路があつた。現在の道路の三分ノ一乃至四分ノ一位の幅員で、二人が並んで歩くとい杯になる位だつた。恰度法善寺の例の食傷新道を抜ける程な狭い露路だつた。その露路の中には白首の出頭没頭する射的場等が連り、晝も醜業婦が行人の袖を引く事が稀でなかつたとの噂さだつた。

その露路の奥の方、南側に小さい端席があつて、新内節の定小屋だつた。勿論、新内節一本で興行するのではなく、源氏節が同座してゐた。此所が當時の若い衆の人氣を集めたもので、若し播重や竹横の娘義太夫が堂する連の本場であるならば、此の一座は唯かにイナセな哥兄達のエロ氣放散地帯であつたと言つてよい。

元來、日本は昔から迎もセンチメンタルであつた。日本人の唱つものは殆どセンチメンタリズムである。日本人の情緒は斯く昔から烙印づけられて來たのであらうが、就中其の中でも一種艶厚なのは新内節だつた。それは餘りにもセンチメンタルに偏重した傾向があつた。新内を開き乍ら若い男女が偶と心

申したくなつて生命を縮めたといふやうな話が可なり遺つてゐるが、それほどに男女のハートを顫動せしめるには十分だつた。可憐な節調でぐい／＼と迫つて来ると、若い人々は矢も楯も堪らないほどに夫れに魅せられ心からその情緒に溶け込んで行くのを餘儀なくしたのだ。即ち新内を聞き乍らホロリと甘い涙に浸つたものだ。

當時、この新内節に小品（或は小染だつたか）といふ若い逸品があつて人氣の中心になつてゐた。非常に男好きのする魅力に富んだ女だつた。廿歳前後だつたと思ふ。その女が舞臺に出ると大入札に包まれた祝儀袋が數多く舞臺の前に出されてヤンヤと喝采した。つぶし島田に結つてゐて、髪はつれが頬にかかる時、既に其の新内は高調に達してゐ、時にはがつくりと島田の根が緩む時があつた。その一種異様な相貌に接して觀客は我れ知らず恍惚とするのだつた。謂はゞ顔面筋肉より連想する一種の自慰的満足に過ぎない。客の多くは斯の種の昂奮を感ずるためにげ／＼と足を運ぶに他ならない。

娘義太夫とは別な、華美で色氣なつぶりな肩衣をつけてゐたが、その魅力は何と言つても紅を極度につけた唇にあつたのだ。現在の

女給やダンサーが唇にハート型の性的魅力を放散するのと等しい。而も、その性的魅力に富む唇が、喃喃として情話的曲節を囁くし至め、結ばれ、解け、いろ／＼と變化に富むのであるから、耳に可憐な情趣を味ひ、眼に斯の性的昂奮を促されるのであるから、若い哥兄達が夢中になつて通つたのも當然であらう。

而も、この小屋の二階は自由に彼女達の部屋との交通が可能であつて、眞眞連中は、それが一番の樂園だつたのだ。謂はゞ斯うした空氣の中に役女達との朗かな談話の交換を唯一無二の慰藉としたのだ。だから客と彼女の女たちとの關係が如何に自由で且つ危険であつたかは察するに餘りがある。

この一座は筆の十四五歳位まで——或十七八歳位？——流行してゐたが、其の後の消息は否として知らない。筆者は少年時代に四五度、自分の家の職人達に伴れられて來た記憶がある。そして子供心に故知らず其の憐れな節まわしに涙ぐんだことをはつきりと知つてゐる。新内といふものは未だ斯うして春の眼覺めを知らぬ少年の魂にまで、何となしに涙を催すほどの魅力的な機能があつたのだ。

源氏節は新内程のせつ／＼たる情愛は乏しいが、然し、ごくことなく素朴で然して輕快なメロデーだつた。恐らく新内語りの餘技として存在したものに過ぎないのであらう。

娘義太夫の多くが弾き語りであつたのに反して、これは太夫と絃とは別で、そこに兩人の呼吸がしつくりと合つて特殊の興趣を添へたが、中には弾き語りのものもあつたと記憶する。

(13) 小寶席

一錢屋の項で、彌生座前の一錢屋を小寶席かと記述して置いたが、あれは筆者の誤りで小寶席は現在の常盤座の南隣りであつて好丸一派が萬歳興行してゐるのがそれである故に前説を爰に訂正しておく。

然し、前記の小屋名は失念して了つた。單に一錢屋と通稱してゐたのを記憶してゐたから、その席名をすつかり忘れてしまつたのであらう。

この小寶席は、恐らく千日前に現存する小屋に於ては最も古い部の一つであつて、昔の小屋は大火に焼失したが、その面目は矢張り依然たる昔の俤が存してゐる。

最も、この小屋でも以前は現在のやうな萬歳と俄と江洲音頭等のチャンボンの興行を

やつてゐた時代もあつたが、その時には舞臺は往來の方にあつて客は奥の方から表へ向つて見物したものであつた入口も左右兩方にあつて、同じく一錢屋式の興行法だつた。いつの頃よりか現在のやうに（或は大火後か）改造されて了つた。

今から三十年位以前には、この小寶席は所謂千日前特有の見世物興行の一つであつて大蛇も来れば、狸々もやつて来る。北海道生れの手無い坊も、九州肥前の産物鳥娘も、何でもやつて来る。殊に筆者の記憶に違つてゐるのは怪談藪抜けや、地獄極樂の生き人形である。

藪抜けは以前は能く流行したもので、又、可なり幽霊や化物を活躍させて見物人を驚かせたものだつた。今日は斯うした見世物も段々亡びつゝあるが、以前は其筋の取締りも可なり緩慢だつたのか、思ひきつた化物を出現せしめた。

筆者の記憶する中では（或は小寶席ではなかつたかも知れぬ）古い雪隠があつて道は何うしても此雪隠の戸で行き詰つてゐるから其の戸を開けるか但しは以前來た道に引つ返すかの二途しかない。そこで恐は／＼雪隠の戸に手をかけると、何うやら化物の出る氣

配がする。然し、開けなければ道が通じないから思ひ切つて戸を開けてみると、内部は暗いのだ。窺つと尙ほ覗くと向うの方に何うやら道が通じてゐるらしく、黒い布が暖簾のやうに卸されてゐる。已むなく雪隠の中へ入つて向うへ行かうとすると、雪隠の中で、下から陰火がポーと燃える。きやツと一聲、慌てゝ表へ飛び出ると、どこやらでどつと笑ふ人の聲が聞える。それが馬鹿に恐怖を催ふさすやうだつた。

胸を撫で下して、それから勇氣を出し、再び雪隠を潜るのが大抵な人の常道である。そして陰火を承知で内部を抜けやうとすると今度はカタカタと音がして、長い、白い手がニユーと出る。勿論人形であり、下から人間が突き出してゐる位のこと、承知してゐるが、あまり長い氣味のものではない。

黒い布をわけると又通路になつてゐる。つまり此の雪隠は一つの關所である。恐しい關所もあつたものだ。

又、も一つ記憶するのは、雪隠と同じやうに行き詰つた道があつて、そこに大蛇が眞紅の口を開けて、今にも一と呑みにせうと火を吐くやうだ。その口が馬鹿に大きい。謂はゞ人間一人が少くし小腰を屈めると立つて歩

ける位だ。

即ち、この蛇の口が向うへ通する道なのだから小心なものは一寸こいつを潜る事ができない。蛇は布と紙とで製してゐた。口中へ入ると、やはり紅い火がぼんやりと燃えて餘り長い氣味のものではなかつた。

斯うした藪抜けを小寶席も興行してゐたのだ。筆者の強く印象に残つてゐるのは、筆者の及人にSといふ飄輕者があつたが、これが少年の頃に、筆者と今一人の友人Yといふのと三人伴れて、この藪抜けに入り、その時ニユーツと出た幽霊の首をSが無造作に引つつかんだため、その機關を痛め、三人共に興行師に大聲で怒鳴られて、小屋の外へつまみ出された事があつた。それ以來、あまり藪抜けと親しくならなかつたが、それまでは恐いもの見たさで、よく大人の後に従つて好奇心を満足させたものだつた。

地獄極樂の生き人形は、現在でも天王寺の彼岸には春秋共に出てゐるが、あれと同じやうに、表の入口に鐘を叩く鬼の人形が出てゐて、カーンカーンと叩く度に、ひよくり、ひよくりと人形が動く——而も、その動く度にそれを引く綱が伸びたり、縮んだりしたのが眼に映つたものだ。地獄極樂といふ宗教的な

（以下三九頁へ）

句を味ふ

——りよ誌本の月前——

南二・三杏・人琴

光耀抄より

二南提出

赤ん坊の鼻の低さを母つまみ

愛子

二南……本誌一月號に川村花菱氏がユモア
ー中心主義を稱へられて、川柳はおかしくな
ければ、川柳でないと言極言されて居ります
が、此のおかしいと云ふ言葉は滑稽とか笑ひ
とか云ふものを指して居るものであると思
ひますが、一寸警戒すべき言葉であると思
ひます。

何故なれば笑ひの中には、ガラ／＼笑ひと
云ふものがあるのを忘れてはなりません。ゲ
ラ／＼笑ひの句は川柳を墮落に導くもので
はありますまいか。川柳に必要な笑ひは(一)

朗かな咲笑、(二)湧き起る微笑、(三)不可禁
の苦笑であると思ひます。此の句は(二)に屬
して居ります。

琴人……批評は直接句にぶつかつて、戴く方
が簡単に済むと思ひます。此の句は素直に云
つてあると云ふ丈で、又その中に母性愛が見
えてゐる、只それ丈で大したものではないが
その大したものではないものを、取扱つて何か
人間味が、そこに濃厚に現はれてゐると思
ひます。

二南……「低い鼻」とせずに「鼻の低さ」とし
た處につく／＼と子を見詰めて居る母の愛
情が現はされて居る。

杏三……此の句のやうな日常茶飯事を句に
作る場合には、其處に作者の鋭い眼、即ち或
る意味の發見がなければならぬと思ひま
す。只日常茶飯事を十七字に纏めた云ふ丈
では、所謂報告川柳となつて了つて讀む人の
心に訴へるものが、何も無いのではないでせ
うか。作者の一層の努力を祈ります。

川柳塔より

杏三提出

好きな女がナイトキャップを編んで
ゐる 靜太

杏三……此の「好きな女」はラブしてゐる人

ではないのでせう。只何となく好ましいと云
ふ程度の人であらう。其の女の人がナイトキ
ャップを編んでゐるのは、誰の爲であらうか
嫉妬と迄はいかなくとも少くとも、或る羨望
と云ふ様な軽い心の動搖をさりげなく句に
纏めた處に作者の老巧さがあると思ひます。

二南……「編んで呉れ」ならば明かに戀して
居る女と解し得るが「編んで居る」と平然と
傍觀的に云つて居るのであるから、杏三氏の
説にもうなづける。

琴人……此の句は大に於て、杏三君の説で
盡されて居ると思ふ。私は此う云ふ境地を味
ふには餘りに若い血が枯渇して居るやうに
思ふのが自然此の句に深く衝動を興へられ
ない譯かも知れないが、今少しく深刻に感激
を昂張して女に對するにも、全部を投出して
欲しいやうな氣がする。要するに句が弛緩し
て居るやうに考へられる。

二南……私は羨望と云ふ感じよりも、自分に
呉れるのではないだらうかと云ふ甘い感じ
が先立つて居ないかと思ふ。

杏三……今琴人氏が此の句は弛緩してゐる
様だと云はれましたが、私は此の句が弛緩し
てゐるとは思はれません。勿論此の句は作者
の戀愛から来る熱烈な衝動を疎んでゐるの

では無くして軽い羨望とか、微かの待望とか云ふ極く軽い心の動きを句に纏めたものとして此の表現は適切であると思ひます。

琴人……其の點お説に異議はありません。只私の氣持が好き女に對する傍觀的な態度が飽き足らなく思はれたので、もつと突込んだものを欲する爲めに云つた迄であります。

琴人提出

かくもこころほそりし金をにくむ

光 哉

琴人……よいと思ひます。自分の魂を撫ぜながら、金を前に見詰めて居る様うです。

杏三……舍を前に見詰めて居るのではないのでせう。概念的な金其ものに對する呪詛を咏つたのでせう。

琴人……そこで、金にしたいたげられてゐると云ふ氣持を句に纏めたのであります。

二南……「ほそりし」は「ほそらせし」と同意に解してよいものであらうか。

琴人……「こころほそりし」はこころ消極的にさせた金を憎むと云ふのと同意であります。

杏三……此の句は定型率ではありません。三三四三三でいつてゐますが、リズムの上からは之で差支ないと思ひます。此の場合に「

ほそらせし」と云へばリズムに破壊を來ませう。一体川柳とか俳句とかの短詩では自動他動の區別は餘り喧ましく云はない様です。

二南……併し能動と受身を混同さす事は問題ではありますまいか。此の句では明らかに句主にとつて受身でありますが、而も「ほそりし」と能動にする事は短詩と雖も看過し難い誤謬だと思ひます。

琴人……此の句が「ほそらせし」と句主に受身に判然と現はすと、此の句が説明に墮す虞れがあるので作者は「ほそりし」と全部を不定型率で救つてゐるのだ。此處が作者の句の構成に老練な點である。

近作柳樽より

二南提出

人の紙幣上手によんで淋しがり

無 鬼

二南……「淋しがり」と云ふ言葉は克く用ひられる下五であるが、此の場合問題にする價值があると思ふ。私も職掌柄此の句のやうな經驗の持主であるが、且つて路郎師に「毎日紙幣を繰つて居ると單に紙片としての價值しか認められなくなる」と云ふと師は「もう一つ自分のサラリーと比較して淋しい氣持

になる手合ひもあるよ」と云つて大笑ひをされた事があります。

杏三……何うも此の作者は餘り樂に句を作り過ぎてゐる様に思はれます。例へば他の「着飾つて」「憂鬱に」「減俸に」の句にしても餘りに樂に作り過ぎてゐると思ひます。此の句にしても「淋しがり」とせずにもう少し作者の氣持を深刻に云へば句が生きて來るのに「淋しがり」と月並的な表現をしたので句がすっかり平凡になつて終つたと思ひます。琴人……今杏三氏が云はれた此の作者の句は所謂常套的に墮して居ると云ふ言葉は此の作者に採つてよい言葉だと思ひます。其の點では私も同じやうに思ひます。先程二南氏が此の句に對するお説がありました。二南氏は銀行へ勤めて居られるので、毎日紙幣の山を見て居られるから確かに其れによつての淋しいと云ふ氣持は免疫性になつてゐられるであらう。

私見たいな貧乏人は時たま十圓札の五六枚も手にした時、其れが自分のでなかつた場合ばとても淋しい。それは自由に使へないと云ふ淋しさであります。同時に自分の影が薄くなつた様な感じさえします。其の點先きの路郎師のお話のやうになるものゝ例である

のであります。

杏三提出

日曜の雑布ばけつ陽が當り

大門

杏三……所謂スケツチ川柳として纏つたものでせう。

琴人……私共のやうな籠の鳥に等しい腰弁にはたまさかの日曜は實に私の日曜であります。

此の句は味ふと私の日曜日にびつたりと當嵌つた氣持になれる句だと思ひますが、こゝうした處は餘りに多く似たやうな場合が殊はれてゐるので、自分の氣持にびつたりと合つて居ながら物足りない感じが致します。

杏南……運起きたり曜の主人の顔が聯想されてゐるので、要するに杏三氏の云はれた如く日曜の朝ののんびりしたスケツチに過

新誌友

(六年三月四日まで)

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何卒新讀者を御勧誘下さる様御願ひ申します。御紹介下さる方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますから、お申込み下さい。(縁雨)

渡邊碧、頼廣弘法、前田一男、中村久雄、石田石人、藤田紫石、林彰、小村政一郎、小西無鬼、角田のぶ(關本雅幽)、松矢篤利(松丘町

ぎないでせう。

杏三……日常茶飯事の中から秘やかな喜びを見付け出して夫れを咏ふと云ふ事も確かによい事には相違ないと思ひます。此の作者の句は何れも皆相當纏つてゐて、卒のない句が多い様ですが先程琴人氏が云はれた様に

もう一步踏み込んで深い境地を咏ふ事を望むのはこちらの無理でせうか。

二南……それは下五の「陽が當り」が餘り常套的に響くからでせう。杏三氏の云はれる秘やかな喜びをこの句についてもう一度説明される必要がありませんか。

杏三……私の秘やかな喜びを云ふのはばけつに陽が當つてゐるその長閑さを云つたのです。

琴人……此の句は先程も申上げた様に悪い句とは思はれぬ。三句の中でも此の句が優れ

てゐると思ひます。詩人としてではなくとも普通人の氣持としても確かによい境地であります。こゝう云ふ境地を取扱ふには是以上には出られないかも知れない。それ丈多くの人が同じ様な境地を味つてゐるので、取材が新しいものでないと云ふ所にピンと來ないものでありませう。

琴人……大体に於て私の觀賞する立場に革命が起きてゐるのか、今一步突込んだ句に接したいと思つたが今月號には私の欲する様な句が見當らなかつた。

× × × × × × ×

杏三……一体本月號の近作柳檀は十二月五日締切である、川柳塔は一月五日締切で一方は忙しさのために一方は呑み過ぎのためによい句が出来なかつたのでせう。

二南……成程そう云へば金と酒に關する句がうんとありますね。

喜びへ銚子次ぎ次ぎ並べられ 紫石。
六六頁上段十行目
その疑心暗夜へ狂奔續くなり 紫石
二十四頁九行目
事總べて忘れて見たい唄が出る として
六三頁中段天位
愚痴っぽい女財布二つ持ち 柳次。
三十一頁の四行五行の二句は白山とあるは
白峰の誤

前號の正誤

八三頁署名欄第十卷第五號募集令 座席券誤
六四頁上段三行目

各地柳壇



＝れ創を句るあちのい＝

本社二月例會

二月八日

於道頓堀俱樂部

本社例會を南地道頓堀俱樂部に開く。この夜主幹路郎師病癒を見事征服して久しぶりに出席せられ、十週年記念句會其他に病癒の爲缺席したるに對し謝辭を述べられ、次で句會の刷新に就いて語らる。最後に久し振りの角力吟をなし、感興をそへて散會。

當夜の出席者

路郎先生、綠雨、麗光、坊茄子、水車、機見女、鶴峰、比古、星城、默平、素月、冬光、晚春、遊步、窮巢、禿山、勝二、鮎美、卜居南、鏢、四五磨、裸人、涎湖、町二、一笑、沒食子、柳次、進一、戀人、比左夫、春光、里十九角丸、透霞、鐘生、夕鐘、無鬼、正太郎、みづる、白柳子、夢裡、華水、即の諸氏と私(琴人記)

兼題

吹雪

路

耶選

畫に書いたやうに吹雪へ二人居る責任は重し吹雪は降りしきり孝行の挿繪になつた大吹雪この器業せめて吹雪に慰まん序幕から凄じ吹雪の哀話篇信號手吹雪の中の吾れを知り情痴の唇へ吹雪降りしきり吹雪露れて部屋帽子が墜する牡蠣船は吹雪の中に灯かともり一人旅吹雪の町へ下ろされる久々の故郷は吹雪あるばかり海からの吹雪の部屋に泊り客俳優の苦心吹雪へ立ちあがり吹雪には哀れ大きい馬の顔又パスが吹雪に客を残しとき(人)大阪の吹雪電車の中へ逃げ(地)争ひの山を吹雪が包みたり

耶選 柳笑 鐘生 里十九 即 沒食子 方眠 坊茄子 町二 琴人 水車 同 鮎美 同 透霞 同 勝二 夕鐘

(天)約束の金だ吹雪を突走り 席題 大笑へ火鉢の灰が舞ひ上り 弱點を隠す社長の大笑 笑ふだけ笑ふて春の寄席にある 大笑へ父は眼鏡を拭いてある 眞剣を大笑にして裁くなり 萬歳會母はばからぬ大笑ひ 大笑ひしてからあとをかしこまり 晚酌の父を圍んで大笑ひ 大笑ひしてから不意にあとをむき 社長室哄笑しきりに洩れて来る かたことをいふ子を猪口大笑ひ 激情を笑ひとばして屠目を干す (佳)思ひきり笑つて春の夜を展る (同)爆笑を一間へだてゝゐる (同)大笑へ婦人商並を見せただけ (同)満足な青空へ大きく笑ひ見る (同)死の陰の日向へ歩む哄笑よ (軸)大笑ひして懷手アイトと去に (同)言ひ負けた父へ家中大笑ひ 席題 風車 風車まはして人生觀をみる 風車うごかぬ空が霞んで居 スチツチへ暫し止まつた風車 職工の一人風車を見つめ 透明な朝をクルクル風車 風車競ふ様子は見へざりき 子守が持つと音する風車 風車もう捨てられた夜の隅 風車がまわる光もまわる春

人選 人選 變人 湖月 素居 晚春 素月 涎湖 機見女 默平 里十九 素月 水車 柳次 坊茄子 比左夫

風車子の向く方へまわるなり
晩景へ風車はいって静なり
(佳)風車冷たき部屋でとりたる
(同)人食べたるに風車を肴へやり
(同)風車ボラの青い風があり
(軸)父と子の呼吸が真白し風車

席題 罰金 水

車選

(勝)國擧げて男子出生待つ日本
(負)好い男とて口惜しい事があり
(負)朝風呂に顔をひたした公休日
(勝)恢復期倦を見つけた朝の風呂
(負)裏切った夜空に星の冷たさ
(負)嬉んだ言葉全く裏切られ
(勝)戦争で死んだ子へ母泣か
(負)朝霧へ一人二人最後の中隊
(勝)其欠伸漫画に書け與太に見へ
(負)欠伸しながら指を折る給料日
(勝)天井の鼠へ猫を真似てみる
(負)猫の聲ラガの向ふ優さ男
(勝)墨すつたまふで戀文はかざ
(負)懸命の仕事へ笑みを浮かぶ戀
(勝)風呂行と針箱の一錢妻は足し
(負)一錢へ半屋二ツに切つてやり
(勝)雷に階級しばし忘れられ
(負)雷に料理の手をば耳にやり
(勝)口笛の春のリズムを耳せて行
(負)口笛の戀歌を母は知らぬなり
(勝)自動車賃だけは悪友出しても
(負)悪友は或る日母へと何か提げ
(勝)腕時計養子の腕のたくましく
(負)腕時計毛深い腕に光つて
(勝)人の過手袋一つ踏み當り
(負)出盛り(香具師)しし聲を張り
(勝)退校をされた男の戀愛論
(負)退校の今日に限りに出る校舎
(勝)俺も来るとこと思ひ掃除する
(負)御先祖の墓を案じて他國に居
(勝)市場まで誘ひ合ふてる新世帯

罰金を恐れ兎に角頭下げ
罰金に肩を十ほどたかされ
罰金の三度目巡査フト笑ひ
罰金の裏に泣いてる老の父
頭下げてきて罰金おさめて来
罰金は二進も三進もなく取れ
失格はせず罰金ですむ違反
罰金の値切れたけを奢られ
罰金を税金といふ運轉手
罰金の後姿へ息をつき
(軸)罰金しアスファルトの感觸

席題 辻占 互

水選

(勝)國擧げて男子出生待つ日本
(負)好い男とて口惜しい事があり
(負)朝風呂に顔をひたした公休日
(勝)恢復期倦を見つけた朝の風呂
(負)裏切った夜空に星の冷たさ
(負)嬉んだ言葉全く裏切られ
(勝)戦争で死んだ子へ母泣か
(負)朝霧へ一人二人最後の中隊
(勝)其欠伸漫画に書け與太に見へ
(負)欠伸しながら指を折る給料日
(勝)天井の鼠へ猫を真似てみる
(負)猫の聲ラガの向ふ優さ男
(勝)墨すつたまふで戀文はかざ
(負)懸命の仕事へ笑みを浮かぶ戀
(勝)風呂行と針箱の一錢妻は足し
(負)一錢へ半屋二ツに切つてやり
(勝)雷に階級しばし忘れられ
(負)雷に料理の手をば耳にやり
(勝)口笛の春のリズムを耳せて行
(負)口笛の戀歌を母は知らぬなり
(勝)自動車賃だけは悪友出しても
(負)悪友は或る日母へと何か提げ
(勝)腕時計養子の腕のたくましく
(負)腕時計毛深い腕に光つて
(勝)人の過手袋一つ踏み當り
(負)出盛り(香具師)しし聲を張り
(勝)退校をされた男の戀愛論
(負)退校の今日に限りに出る校舎
(勝)俺も来るとこと思ひ掃除する
(負)御先祖の墓を案じて他國に居
(勝)市場まで誘ひ合ふてる新世帯

辻占の子に子の如くまはられ
かつぎの姉辻占の聲をとめ
辻占は辻占として見るだけ
辻占の吉かと覗いた好いた人
辻占は閑な女給へ一ツ賣れ
垢じみた手で辻占をつきつける
辻占へ嬉しく残す下駄の鈴
あきらめて見た辻占吉とあり
しつこいとどなす辻占買はされる
辻占を牛分讀んで猪口をうけ
辻占の序蒔豆摘んでる

席上角力吟

白柳子
春光
麗光
南鐐
鮎人
鮎美
一笑
晚春
素月
夕菰
坊鐘
窮巢
涇湖
無鬼
勝二
鐘生
水車
勝選
沒食子
麗光
冬光
默平
涇湖
冬光
南鐐
比左夫
柳次
默平

(勝)國擧げて男子出生待つ日本
(負)好い男とて口惜しい事があり
(負)朝風呂に顔をひたした公休日
(勝)恢復期倦を見つけた朝の風呂
(負)裏切った夜空に星の冷たさ
(負)嬉んだ言葉全く裏切られ
(勝)戦争で死んだ子へ母泣か
(負)朝霧へ一人二人最後の中隊
(勝)其欠伸漫画に書け與太に見へ
(負)欠伸しながら指を折る給料日
(勝)天井の鼠へ猫を真似てみる
(負)猫の聲ラガの向ふ優さ男
(勝)墨すつたまふで戀文はかざ
(負)懸命の仕事へ笑みを浮かぶ戀
(勝)風呂行と針箱の一錢妻は足し
(負)一錢へ半屋二ツに切つてやり
(勝)雷に階級しばし忘れられ
(負)雷に料理の手をば耳にやり
(勝)口笛の春のリズムを耳せて行
(負)口笛の戀歌を母は知らぬなり
(勝)自動車賃だけは悪友出しても
(負)悪友は或る日母へと何か提げ
(勝)腕時計養子の腕のたくましく
(負)腕時計毛深い腕に光つて
(勝)人の過手袋一つ踏み當り
(負)出盛り(香具師)しし聲を張り
(勝)退校をされた男の戀愛論
(負)退校の今日に限りに出る校舎
(勝)俺も来るとこと思ひ掃除する
(負)御先祖の墓を案じて他國に居
(勝)市場まで誘ひ合ふてる新世帯

春光
失名
即生
坊鐘
鮎人
比左夫
ト居
星城
遊步
南鐐
涇湖
四磨
冬光
一笑
勝二
素月
角丸
素月
白柳子
失名
鮎美
沒食子
機見女
窮巢
比左夫
麗光
無鬼
琴人
水車

(負)買ひ客へ市場はごなり
(引分)肥へたがマダムのつなり
(引分)マダムフト心の動き見付
(勝)氣にかゝる夢を父を問ふ手紙
(勝)夢になれ夢になれ時鳴る
(負)髪結が口をつぐむと時鳴る
(負)髪結も今も美容師と名が變り
(預)奉公の子に會ふて居る勝手口
(預)零下五度奉公本當に厭になり
柳次

川柳雜誌社
神戸支部 十週年記念句會(神戸)
二月四日 西村明珠報

神戸支部が創立十週年を迎へた爲め本社
の後援で記念句會を八宮神社々務所で催し
た披露に先ち
神戸ツ子の意氣 庄 萬よし氏
川柳の笑ひに就て 麻生 路郎師
の有益なる御講演があつて支部近來にない
盛會を見た、記念寫眞を撮影して十一時散會
閉會後路郎先生、萬よし、綠雨、かほ香、
紳樂、亂就、春秋、繁堂、幸捐、竹楓、華水
の諸氏と海川新聞地大安にて小宴を開く皆
有藝の士の集りの事として時のたつのも忘れ
て散會したのは實に翌午前一時を過ぎてゐ
た。

兼題 上品 二 南選

上品によぶれて来たが腹が減り
ストロに唇を許したリダ水
上品を装ひ過ぎて買損れ
上品な聲で生花から戻り
上品に我が子が見えて縁遠し
變人

上品を笑へば笑ひかへすなり
 病身の母上品に座る春
 上品のマグ夫の杖を持ち
 上品に笑ふ女に金がいり
 つまじ怒り見せるハンカチ
 音のせめやうに手を拍つ貴賓
 上品な鼻して出納係
 (秀)上品な指先になくまん
 (同)上品にある食指が勤くまん
 (軸)百爛にある上品の氣がとがり
 兼題 進む 明
 進行係椅子に二三度つつまづき
 鬼隊長進めとぶつたはれ
 新家庭時計を少し進めとき
 表彰へ三步進んだ孝の徳
 よく進む眼醒しのまゝ今日は起き
 爆弾を提げて日本の進む意氣
 一步二歩三歩進んで賞を受け
 真先きに進む聯隊長の髻
 少し無理に進めて師匠旅へ出る
 嫁入りの話を進め炭をつぎ
 秋別のそれから騎馬を西に向け
 団体旗だけが進あり日向ぼこ
 ちり々と進む進あり日向ぼこ
 進級の窓を開けると温い風
 (佳)泣きたる二人の膝が進みよる
 (同)狂人にかゝわりも世が進み
 (同)心配になる東京の子の思想
 (同)食慾が進む手の色爪の艶
 (同)除名から懸は急進的となり
 人兄弟にそれゝ進む路があり

吉左右 幸光 晴夫 竹楓 豆秋 同秋 春南 珠選 竹楓 吉左右 春秋 仲耕 豆秋 翠石 白柳 艸樂 幸車 夕鐘 二南 變人 同狂 同然 同生

(地)温泉に進む行けば醫者來てる
 (天)進軍ラッパ慰問袋を捨てて
 兼題 神 華
 神様を信じて過ぎて、虚をつかれ
 神様は氣分の通り拜まれる
 神を信じて切つて朝霜を踏みしめる
 神前でふと別壇へ氣をとられ
 神様を信じて夢を打けしぬ
 神前の二人これから長い道
 神様のお告げのうへを蠅が飛び
 無神論者國へ歸れば笑ふだけ
 神佛にたよる弱さをふり返へり
 出寫しの寫真屋神に背なを向け
 新婚の旅神様へ手を合はし
 詩をつくる事はなんにも云はぬ神
 神様がはつきりある負傷兵
 神棚の下の生活苦が續き
 神様の信じてれむ處女の眉
 赤貧の底神さまを夢に見る
 癒つたか死んだか神へ言つて來ず
 (佳)船長は寄港のたびに神へ來る
 (同)神苑の廣さに朝の郵便夫
 (同)神様を味方に舞妓同志ある
 (同)かすむ大空の心は祈り入る
 (同)神々に處女の顔を聞いて呉れ
 (人)制服で神に近づき禮をする
 (地)共稼へ櫛が枯れて居る
 (天)スキツチの手前上神が哭れる
 席題 延びる 縁
 羊羹を包み乍らに日に延ばし
 延びのその日へ胸の疲れたり

華水 一狂 水選 明珠 夕鐘 翠石 變人 春秋 鮎美 萬よし 竹楓 かほる 同狂 一狂 同耽 同秋 同豆 幸捐 新水 二南 同生 同繁 雨選 變人

病上り髭延ばそかと思ひ
 延びるだり延びてボブラは揺れてゐる
 失職へ此の頃髭の延びること
 更生へ髭は延びるに任かしとき
 傷らぬ姿の影が延びてゐる
 兼題 席題 音 かほる
 痴情の二人へ強い風の音
 大阪の音を遠くにお詣りし
 大阪に住み朝の音夜の音
 音楽へ靴先動く若きなり
 音を待つやうに深夜の机に
 登山靴音がしてある五千尺
 大膽な音にスキツチひられる
 電線の鳴る冬の夜を獨り行く
 戸締に力の入つた夜の冷え
 病んでから落葉の音がなる
 風の夜を電車が行り過ぎる音
 音さして見て發明の甲斐があり
 ほこる音を縫はして雨の音をきき
 催促をする受話器のきつい音
 悲しみは近し博士の聴診器
 旅すればその地の音の朝に起き
 兼題 席題 風景 亂
 風景へうつと女手をゆだね
 スチームの展望車から雪景色
 風景のハンドバックが軽すぎる
 風景の一つにされて網を曳き
 病院のある風景に續く道
 港街車夫が大きく描かれる
 風景へ人夫募集が破れてゐる
 風景にこだわる酒が冷えてゐる

一竹 不然 艸樂 鮎美 繁堂 水車 晴夫 一秋 春水 華秋 白柳 不峰 夕鐘 二南 同珠 同明 同伸 同選 吉左右 明路 艸樂 竹楓 同生 同秋 同南



前列右より 堂繁・白雲・柳子・然堂・南二・高上・萬・那路・水軍・ほく・車水・鑑夕・美松・松峰・居卜・夫勝・人勝・石聚・路仲・生明・子孫・列
後列左より 秋香・捐者・夫利・笑一・取龍・任一・珠明・秋豆・楓竹・堂繁

會句念記年週十戸神(明説眞實)

風景の感じを添へる 縞ズボン
繪ハガキの亡び行く村とは見えす
萬よし

善 人の掌にある 銅錢よ
美選

善 人の善い事をした夜の火鉢まるくあり
晴夫

善 人祝された男の厚司で来
竹楓

善 人へ急なハンドルきつてくる
伸路

善 人と云ふ文字へ自嘲をきける女
繁堂

善 人の箸の太さに嫁がくる
華就

善行へ巡査の数が殖えてくる
狂水

(人)改善を思ひ重役うそ寒し
同南

(同)善人へ壁は眞白くうなづけり
ト居

(同)春曉に善い就職の夢を見る
竹楓

(地)勧誘へ善い事だけの本をくれ
變人

(天)善い人へ當然すぎる眼をける
白柳子

(天)我が姿善い事をした影になり
白柳子

(軸)善き心第二の戀へ黙しきり
美

川柳雑誌社
鶴町、塗青聯合新年句會(大阪)

一月二十六日 於鶴町衛生組合事務所
熊谷紅報

題 日記
木馬選

笑はれた通りになつて日記帳
水車
子の日記見るべからずと書いてあり
寛柳
新妻の日記氣になる日が續き
元山
日記帳今日の嬉しき書き切れず
遊歩
偽はらぬ姿日記に淋しくて
紅幽
長い日記を書いて寝つたか
紅幽
父の日記にフト見つけたたり女の名

(人)女房の記憶を借りる日記なり
光峯

(地)卒業をしたと日記へ書いてる
白馬

(天)みだらを追ひ日記付けてる今日
木馬

(軸)日記には結局負けたと書かず
人選

題 錢別
變

錢別の代りに呑んだ君と僕
水車

錢別へ不義理な過去もあるのなり
ト居

錢別を呉れさうなのへ話して居
木馬

(人)錢別の何にか唄つてやる氣持
岩石

(地)錢別を貰ふて涙ぐむ話
小柳子

(天)塵紙に丸め錢別握らせる
一選

題 拔毛
紅

毛の抜けて仕まつての助役なる
白峯

抜け毛など心配するなと若旦那
元山

(人)美粧院抜け毛へ世辭のなりけり
水車

(地)何時の間に淋しきりぬ母の髪
光峯

(天)石鹼が俺の抜け毛を悲観させ
紅馬

(軸)溜息の吐切れに拔毛する
幽選

題 祝電
雅

祝電は届く時間に苦勞する
光峯

祝電とも知らずに母は驚いて
遊歩

祝電を讀む役だけのモーション
水車

冷へた茶を呑んで祝電讀みあげる
同美

祝電へ盛會の灯が近かすぎる
悦洋

祝電へもう分らない程に酔ひ
ト居

祝電へ保健長壽の額が搖れ
晚春

執務なかばに友へ祝電打ちに出る
變人

(佳)祝電に腰の曲つた父が見え
鮎美

(同)祝電へバットを吸て立ち上がり
岩石

(軸)祝電の恩師の笑顔うかがはれ
幽

厄除け

天井に厄除けくすぶつて皆々を無事
厄除けのまふしと光る石疊
厄除けの矢を買ふて来る父となり
主人だけの厄除けと云ふ家を替へ
厄除けの彼方へ父も押されてる
鬼も角も無事に過せた矢を納め
厄除けの袖へケールすれ違ひ
厄除けの守り紐が邪魔になり
厄除けの歸りゆつくり寄席に居る
(五客)厄除けがふぶる健年を越し
(同)年越を厄除神で押されて来
(同)厄除けに來て石橋を渡るなり
(同)厄除けの歸りを呑んで事もなし
(同)石清水去年と同じ人に逢ひ
(人)厄除けは笑ひ乍らも祭られる
(地)厄除けのお守持つて轢かれ
(天)厄除けは笑ひ一語にお詣りし
(軸)厄除けのつもりでの出掛なり
兼選 朝 水

幽選

遊歩 遊美 光車 白峯 水馬 本馬 變人 遊步 一美 小柳 光柳 寬柳 光車 一幽 雅幽 車選 元山 木馬 四五磨 浸食子 紅美 貼居 卜石 岩人 晴天 馬

(同)虚偽と嬌態にゆがんだ朝の壁
(同)朝の父朝の子寒い風が吹き
(同)辨當の温みへ割り電車来る
(人)一錢が惜しい朝の父と子と
(地)情痴の二人に朝の冷き白々と
(天)もう一枚着る朝を見送る
(軸)新聞屋朝の姿を見て通り
兼選 道伴れ 貼
出雲大社へ道伴共が嬉しがり
道伴れが女計りで草臥れがり
道伴れに荷物頼む子澤山
道伴れに寫して貰ふ遊覽地
道伴れとお茶屋の前で別れたり
春の日は永しよい道伴れがあり
道伴れのその戀なりし片断くぼ
道伴れに成つて婆さん若いなり
道伴れが、ブラの下を行きたがり
道伴れが融通のことを酔ふて言ひ
道伴れの笑へば影が重きなりて
道伴れの話は遠くきき行きて
道伴れの友よりうれしい年賀状
(佳)道伴れの名刺もろうて別れり
(同)道伴れと話せば苦勞人同志
(同)道伴れの互に笑ふ女の香
(同)道伴れの一人は故郷を噂して
(同)ガツサン、呼ば道伴れなり
(同)する眼が道伴れより切れず
(人)道伴れの君の希望も面白し
(地)道伴れに成つて大阪迄話し
(天)道伴れの心を強くして呉れる
(軸)道伴れのかくし切れぬお人柄

ト居 山美 山月 貼美 晴天 小柳 水車 美選 富七雄 山月 光歩 遊幽 雅幽 晴幽 雅幽 小柳 元山 變人 公子 光幽 雅幽 新天 晴幽 雅幽 正路 水居 正路 貼美 路車 正路 貼美

道伴れのやましき人の呼吸と知り 同

愚陀追悼句會 (本誌)

時……一月二十九日夜 天牛書店階上
愚陀、晃卓兩故人追悼句會は星凍る夜しめやかに開かれました。披露に先立つて萬よし、白柳子、綠雨、山雨樓、亂耽等各氏の故人追憶談があり、儼なく散つた若き作家の瞑福を祈りました。
それにしても老若不定の世にある私達(はもとと川柳のために精進しなければと思ひました。この夜路郎主幹は御不快のため御見えになりませんでした(機見女記)
出席者
綠雨、文蝶、鶴峰、夜王、紫石、葉平、春光、冬光、夏光、琴人、朴甫、夢裡、亂耽、水車、銀波、禿山、いわな、雅幽、二南、新水、里十九、白柳子、貼美、圓角、翠夢、町二、秋夢草、あや美、みつる、かほる、山雨樓、百秋、機見女、萬よし、即鶴足、探人、

兼選 若死 路郎選
姑の涙は孫を二人置き 新水
制服のボタンちぎれたまゝで死に 二南
若死へ無口な父が火鉢にゐ 裸人
若死へ看護婦心動くなり 白柳子
正月に來ますと二十四で死に かほる
若死も彼の場合には幸福さ 亂耽
若死へ取殘されて圓う居る 文蝶
冬空重く若人の死をきく日 葉平
若死の無口だつたを惜しまれる 夜王

春機 鮎夏 りあ か秋 夢 新 雅 瀨 み 鵜 夕 里 鮎 水 春 朴 銀 秋 町 琴 紫 翠 豆
見 鮎 鮎 りあ か秋 夢 新 雅 瀨 み 鵜 夕 里 鮎 水 春 朴 銀 秋 町 琴 紫 翠 豆
光 女 美 光 美 九 九 草 裡 選 や 美 水 幽 雨 二 つ 足 鐘 九 美 車 光 甫 波 草 二 人 石 夢 秋

したしきは裏口へ来て耳打し
儲けてる其の裏口のせまい事
裏口で殆を待つて待てる
裏口の殺氣を姐御確しかめる
裏口へ母の臍纒り貰ひに来
集金に来た裏口のはいてゐ
裏口を誰かゝたゝく様な風
裏口へ屑屋胡散くさく立ち
裏口へ餘りに近く猫の戀
裏口の語女中のませた聲
裏口へ来て御用聞聲を出し
裏口はまつくら闇みの陰味屋
ひがんでる子へ裏口の閉ら
裏口を出てお隣へ頼む留守
裏口でも一度女に聞き直し
若き忘れて裏口へ持つて出
裏口へ来て寒さは同じこと
取こみの今日裏口をあけた
裏口を締めて本妻一人寝る
裏口を氣易く開けては入る
飯時に裏口開ける用が出来
裏口の蚊の生活を見るなり
裏口は用心の足らぬ賊にあ
裏口へ世帯の愚痴を云ひに
裏口はいなせな男待つて居
裏口は桃の島の月を踏み
叱られた顔裏口の母は云ひ
裏口の音は犬がと母は云ひ
裏口へ来たので軽くみくら
裏でもう一度友を呼んで見
裏口もあれから五年経ちまし

新夏冬禿二雅里二銀鮎水葉夜新自新鶴文春方紫山夢銀か禿二新雅文
水光光山南幽九南波美車平王水柳子水峰蝶光蝶石雨樓裡波る山南水幽蝶

眞口で取引してゐるビール瓶
彼も人も憂鬱かして 石を蹴り 亂
憂鬱の煤の輕さを見て居たり
憂鬱の話のがれて酒を呑み
あきのめがねのくもるゆうゝつ
塀高々とめぐり廻して不眠症
憂鬱な膳へ子供が目をさまし
憂鬱へ子が成癡を見せに來る
憂うつな叱つてくれる母が
憂鬱を嗤ふ男と夜の壁
憂鬱の家督を續いて子が生れ
憂うつが四五人寄ると酒になり
灰色に日のない街が横たはり
鏡拭いてわが憂鬱と相對す
(軸・憂鬱をきく)に生むビルの窓
席題 言 譯 緣
言譯も手紙丈で物足らず
言譯も通らぬ午前二時となり
言譯に大きな袍さげて來る
言譯は三日つゝいた雨の事
言譯にきてもお役所とり合はず
頼まれて來た言譯は腕を組み
言譯に來たなと思ふ巻煙草
言譯に髪をかきあげてかき
言譯の男心に風が搖き
言譯を聞く重役の椅子が
言譯をしてゐるのを聞く貰ひ
會費だけ拂ひ言譯たてゝある
言譯に母前掛をはすすなり
言譯は眼鏡ふき／＼ごもつてゐ

紫文新か二鵜葉秋山同白亂町夢雨選
石蝶水はる南平草樓柳耽裡選

南選

かほる 亂耽 文蝶 かほる 鮎美 かほる 白柳子 夜王 白柳子 山雨樓 里十九 水車 秋夢草 二南

山
西

翠鶉冬かほる裸二圓萬里豆禿紫即鮎夢
夢足光る人南角し十九秋山石美裡

亂 鮎 白 同 葉 同 町 同 亂 同 秋 同 白 同 夜 夏
耽 美 柳 平 二 耽 夢 草 柳 子 王 光

間白峯報
美選
雅幽
岩石
雅幽
富士雄
鮎美
幽選
岩石
遊步
白峯
富士雄
鮎美

變同雅 遊步人 變同雅 幽人

變

白峯 富士雄 一笑 雅幽 岩石 雅幽 峯選 小柳子 遊步 卜居 富士雄 岩石 鮎美 岩石 遊步 鮎美 變人

(天) 死にす江の島の續ハガキ来る
(軸) 鳥の名はご構曳も知らず居る
乃の字 幸男

席題 ジュネーヴ時事吟 西田紳樂選

白々と月の座に迫る星の群
悲虎

ジュネーヴの聲を静かな度量にて
竹雅

ジュネーヴも脱退と言ふ腰で起ち
克美

正義なる孤立ジュネーヴを引上げよ
蜂郎

此の頃の世相之爲替みだれかけ
悟久

ジュネーヴは祖國日本へ意氣高し
昌一

ジュネーヴの春へ泰然と満州國
晃州

聯盟へ三下り半と言ふかたち
乃の字

爆彈投下してやり度いジュネーヴ
紫明

櫻咲く迄をジュネーヴ待ち切れず
同

リットンへ寝醒めの惡ジュネーヴ
山草

喧嘩なら皆で行きたいジュネーヴ
同

代表と別に靜かな壽府の山
欸乃

壽府の雪蹴つて歸れば櫻咲く
同

(佳) 松岡の顔色下曇るジュネーヴも
富美三

(同) ジュネーヴの風雨より雪となり
竹楓

(同) ジュネーヴで大和魂肩が凝り
清堂

(軸) 聯盟よ所詮平和は神のもの
艸樂

兼題 卒業 業 平岩司郎選

卒業して尙退屈な日の續き
昌一

戀人は卒業を辛氣くさく居る
艸樂

卒業の朝へ書留とかけられ
愚公

また違ふ苦勞 卒業からの母
木人

卒業の事を規 願知つてある
福造

太陽が頭の上の卒業日
紫明

卒業の希望 夜更のノート伏せ
悲虎

卒業へ母のプランは出来てある
情堂

卒業の君に梅咲き櫻咲き
卒業をして現實に突き當り
卒業へ下宿の犬も尾を振つて
卒業に一層親しむ花 缺
のげす氣で卒業の日も刈らず行く
證書より勤める先のほしい日だ
(其) 卒業を待てる工場へ不倖せ
(其) 卒業と言ふ無邪氣な顔でいる
(其) 大學を出る彼高女も出る彼女
(其) 卒業すれば別れる雪の山見る
(人) 校門を去る日の雪は輝けり
(地) 卒業のまろき夢見て春に臥す
(天) 卒業の朝を無限にこみ上げる
(軸) 首まで、見ても卒業追つて来

川柳 御旅句會 (大阪)

雑社 御旅句會 (大阪)

二月五日夜 於南地いし堂 生田翠夢報

御旅支部三月例會を支部同人江戸みつる君

の渡満送別會として開催、殊に滞満を期とし

奉天支部を新設し大いに努力するとの意氣

を賞で、路郎先生、翠人先生の送別並に激

勵の辭、次いで支部同人諸君の送別の讃辭が

あつて送別宴に移つた。尙紀太氏に第二世生

誕の喜びあり

紀太氏へ

火の玉の渦まく如し男の子

みつる君を送る

海を渡れば地圖の色が變つてお

満洲は近いとこさと送る側

妻病みて炒りたらぬ豆の數を取る

席題 節分 互選

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

比古

肩東乗つて子供も豆を投げ
年越の夜を金策に星 沢える
紫石

せめてもと女給花嫁姿なり
みつる

誕生へ颯爽として冬をきる
あや美

誕生を嬉ぶ人の呼吸と呼吸
みつる

墨の香も新らしく御産着
即生

生れ出し生命 尊し二月の陽
比古

産聲へ交になつたを意識する
翠夢

満ち足りる思ひ生れた子を抱く
翠平

(軸) 誕生日 節分 一尾、寒い膳
夢選

席題 首 卷 翠

首巻でしつかり冬巻いて出る
葉平

獸の皮首 巻いて動物愛護
即

首巻に家内の匂ひもうつる年
多耶

首巻の柄に個性を見せてある
いさむ

首巻の中から嬌曳にらんでは
香雨

もうキツスきとシヨール口へ巻
文蝶

手はごさのスキ 首巻だれて居る
紀太

首巻にて女は戀を秘めて笑み
比古

銀狐うづもれてある夜の媚
同

(佳) フェルトで出る首巻の躍る
香雨

(同) 首巻に戀がひそんである娘
みつる

(軸) 銀狐して冷やかな顔である
翠夢

席題 出来心 圓

角選

ほんのりのだ、出来心で御座います
葉平

赤い灯へなした金を捨てに来る
文蝶

責任も出来心にして笑つとき
紀太

出来心記事では美人の妻と書き
比古

出来心行先きのない下駄をはき
琴人

出来心冷めたい風の街へ出る
(軸) 順調に乗つて姿の別荘の
人選 圓角

兼題 眞夜中 琴

眞夜中に泣く子に眼覺め汽笛聞く
眞夜中の風がガラスへ突當り
夜の河岸に白き船の揺れて睡れる
しみみ祈る眞夜中影ひとつ
警笛もう眞夜中と云ふ響
眞夜中にフト天井がのしかゝり
眞夜中に星を仰いだ旅の思出
初聲に眞夜中頃の明るさよ
眞夜中のナボレガンの像豪く見え
眞夜中に兒の寝息聞き又寝入る
色街も時計は動く午前二時
(客) 手ぐぐ水に深夜の空のひかり
(同) ラブレター書と眞夜中知つてゐる
(同) 眞夜中に生きて行く道考へる
(同) 眞夜中上醫者の寝てゐるさし
(同) 性寂し眞夜中にとく黒き夢
(人) 駈落の眞夜中頃に眼を覺まし
(地) ちつと座れば眞夜中の冷え
(天) 天地より添ふ眞夜中の聲
(軸) まだ起きてゐるヘンの音紙の音

兼題 感情 路

感情を忘れたようなつるし柿
感情で書いた手紙も讀みかへし
感情のもつれと別にパス止り
(人) 感情のやりば石をける
(地) 感情が動くがまゝの人になり
(天) 感情を一人の母へ和らげる
兼題 送 別 路

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

兼題 送 別 路

旅に出る誇りへ友の晴やかき
みつる會を送る
元氣さは人の羨やむ土地を踏み
見送りは見送りどうし話し合ひ
送別の酒へ別れを忘れたり
送別で酔つて歸れば母に水
饒けの守りて陰で口づける
(人) 玄海の冬渡る人を送る驛
(地) 旅立たず母は地球が大き過ぎ
(天) 送別の空の圓味に雲もなし
(軸) 満洲は近いとこさと送る側
みつる君を送る
(同) 君の若き行け 零下三十度
同 比古 圓角 紫石 翠夢 葉平 文蝶 正夫 人選

川柳御池橋句會 (大阪)

二月二日

村松夢裡報

急激に同志の離散に遇い久しく寂寥をかこ
ち居りし當支部も緊裡一番更生の首途へと
偶々同志宏郎氏の福岡へ轉任を送るを兼ね
て集會を催し更生の第一歩を履んだのであ
る。

席題 送 別

真面目さを賞めた送別の辭が續き
送別へいそがしうな荷こしらへ
悲しみは別に來る日を約せうよ
お別に意外な人が泣いてくれ
送別へ杯受けた儘黙り
送別は淋し上席空けてあり
遊び疲れて二月となりぬ
寒行の大鼓二月の街を打つ

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

席題 二 月

かほる選
ひでし
青兒

寒行の聲は二月の夜を行く
如月の池に五位覺かたく居る
二月夜を歸るダンサの靴の音
ふと見れば二月の空に雲がなし
二月か舞をさらへる積りて居
(軸) 花嫁の噂二月の夜が更けて
(同) 紙屑の多い二月の部屋を掃き
(軸) 新聞を堅く断る 二月なり
席題 シグナル

兼題 先を巡查の手は動き

シグナルの先を巡查の手は動き
シグナルの青耐え難き淋しさよ
思ひ出のシグナル路の狭いこと
信號へ我に返りて下駄の跡
メガホンと赤青黄人の波
シグナルに堅く親子が手握る
シグナルに度膽をぬいた交又點
シグナルへ逢いぬ氣持續くなり
シグナルに見るボスターの好い感じ
シグナルの響やつぱり酔うてゐる
席題 屏

兼題 屏

屏を開けば若き日の夢
屏を押せば急に仕舞つたコンパクト
屏を開けた眞蒼な顔
佛壇の屏へ母の念じ事
期待した人が屏を開けてくれ
屏から無言の儘で女性出る
興奮の言葉屏へ残り置き
川柳 天王寺句會 (大阪)

兼題 天王寺句會

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

兼題 酒

コップ酒をうまそうに呑む義理の親
酒 須崎豆秋報
五 裸人

ゆううつは三本目からチト變り
三三をまれて孟とり落し
呑みにゆく二人の足がよく揃ひ
酒の足蹴上る様に坂下り
あかるさの窓にさしたり祝酒
むつとした心取りなす茶碗酒
妻のこと子のことを忘れて酒に酔ひ
宴會のかたまつてゐるいける口
菊正もありますといふ屋臺店

涙

互

溜涙ふと鼻すぢを通りけり
晴れやかな表彰半生涙にて
書置の此所にも見えり母の背
思ひ出はフト眼頭に熱いもの
母君の涙さしぐむまぼろしや
涙して母は吉報待つものなり
惜敗の涙をこするユニホーム
千秋の想は涙のペンとなり
歸るまでかみしめて來た涙なり
涙流してほふて來る兒に乳を出し

溜息

互

溜息につく故郷の夢を逐ひ
溜息へ母はやさしい聲をかけ
溜息へボクツの馬券空ばかり
溜息へ同じレコードばかりなり
書く文へたま息も入れて届けたり
溜息の子どもは背にれむるなり
寝返りをしても溜息つくなり
溜息へ船路はるかに伸びてゐる
愚息が欠伸にとける一時二時

銀嶺 正雄 豆秋 柳民 三郎 南面子 詩郎 葉光 南面子 柳村 水車 水車 柳村 詩郎 南面子 葉光 三郎 豆秋 正雄 銀嶺 葉光

溜息の朝を數居にけつまづき

水車

川柳 萩之茶屋句會 (大阪)

一月二十一日

奥野禿山報

互

禿山

校庭の梅一本に勵まされ

禿山

梅とたゞ淋しく汲んだ酒の味

九文錢

古梅を賞で、親父の老けて居る

同

物持ちの門松惜しい梅を切り

窮巢

梅干とお粥さんだけ許される

銀波

寒むさうな顔が梅見の酒を呑み

同

梅も見酒も呑む氣の座數借り

同

年趣しへこつそり若うなつて見る

窮巢

節分を化ける積りの寫眞館

禿山

節分を口實に出で寒い風

同

節分へ子も大聲の豆をまき

九文錢

豆まきへ母満足の笑ひだけ

同

子の播いた豆盃へ一ツ飛び

同

節分の髷に髪結待たさる

銀波

豆の數今日節分に売過ぎる

同

節分の豆とお化けの宮詣へり

同

研究吟 ストリーヴ

緑雨氏選

新館へストリーヴの位置考へる

禿山

閑な店女給ストリーヴ圍んでる

同

ストリーヴへ寄るともと與太が飛び

窮巢

ストリーヴへ社長來る迄たかつて居

同

ストリーヴへ外の寒さを持つて來る

同

ストリーヴへ朝の癪癪飛ばして居る

九文錢

重役があたると小使炭をつぎ

同

ストリーヴへ處女の昔を慰める

銀波

寒むさうな顔をストリーヴ眺めてる

同

(客) ストリーヴへ丸の文が燃え上り

同

(客) ストリーヴも賞めて外交話し

同

(客) 空想が石炭入れる音に消え

同

(客) 終列車後にストリーヴ残される

同

(客) 猥談に成るストリーヴ一人増へ

同

(人) ストリーヴの横に預金は待て居る

同

(地) ストリーヴが居るタイヒスト

同

(天) 決心をきめてストリーヴ離る

銀波

研究吟 造花

緑雨氏選

雨の日の造花哀れな姿なり

禿山

宴會に胸の造花も酔つて居る

銀波

夕立に濡れて造花の穂せな色

同

御慶事を迎へ造花の忙しき

同

寫眞は造花構圖に入れて撮り

同

太い手も撫子造る指の馴れ

同

(佳) 造花時々埃りを拂ふのみ

禿山

(佳) 御祝ひの造花に店は榮えて居

同

(佳) 同窓會造花をきつてよく動き

同

(佳) カフエーの花見は造花ばかり

同

(佳) 珍らしい花と思へば造花なり

同

(人) 初戀の壁に造花をさして置き

銀波

(地) 救済に造花賣つて居るお嬢さん

同

(天) カネーシヨシ造花の咲き居る

九文錢

川柳 神戸支部友句會 (幹事)

西瀟

一月二十三日

水選

介 於華水居 西村明珠報

繁堂

晚酌へ厄介者が尋れて來

同

姑のさて厄介な言葉じり

同

厄介をまた引受ける哀人

同

助選

川柳雜誌社螢夕池

川柳短冊展覽會記念句會（大阪）

二月十二日

石森靜太郎

二月十二日十三日 川柳短冊展覧會を開催此
 の日柳友流之助兄の應援を得本社からは縁
 雨氏を始め鮎美 鶴峰 卜居 櫻見 女さんの諸氏
 御出席悦し一同作句にふける。終了後記念
 寫真撮影、尙鮎美 女 作句に天地人に對する賞の
 寄贈を受けました事を謝します。

兼題
色彩
綠
雨選

色彩のつかれ切つたる十二月
色彩を姉にまかせた繪日傘よ
試験管にいれると色が變るなり
色合もよく新妻の好きな柄
色彩をはなつた冬の陽の鈍き

静太
鶴峰
鮎美
松雨
舟路

(寫眞證明) 川柳短冊展と螢ヶ池記念句會
向つて前列の右より鶴齡、ト居、鮎美、綠雨、櫻々女、紅、凡子
(同中列) 一沫、漣之助、愚記、舟路、公平、青鬼、慣兒、紫煙
(同後列) 一塵、靜太、松雨、定城、一美



色彩もいと鮮やかにチンドンヤ
色彩とシヤヅに疲れてレストラン
灰色の空を恨んで胸を病み
貧づしき子等へしやほん玉光る

露 一 一 流
洲 馬 美 之
助

ウィンド(春の色彩やつて来る
 童心に觸れし南京玉の艶
 (佳)色彩も春の姿となりけり
 (佳)色彩の一つで目立つ土人形
 (佳)色彩のない山ながら松青く
 (佳)流行は色彩かへて買すなり
 (佳)色彩りの團子細工も面白し
 (佳)色彩はたふふはりと春の山

兼題 暈 貼 美選

兼題 鮎

澄みし大空君の瞳のやすけれや
 情熱の瞳に桃の花開く
 故郷は濡れた瞳へ遠くなり
 愛人へすれてるやうな瞳なり
 つぶらなる瞳の中に母の顔
 瞳に映るすべてが僕を囁つて
 冷靜な妻の瞳にふれし朝
 (佳)ネオン燈おれの瞳は灰色だ
 (佳)瞳伏せて風塵に耐へんとす
 (佳)瞳にうつる面白き浮世かな
 (佳)瞳つぶれば白きつめが振向いた
 (佳)傷魂の瞳は謎のつめさだ
 (人)瞳の中に小さくつて男ある
 (地)ふとゆば、みのみみがぼくにある
 (天)友の死永遠に眠る瞳へ手ぢりぬ
 (軸)麗人の瞳にうつる松の露

ト居
 鵜峰
 流之助
 一馬
 定城
 流之助
 露洲
 公平
 一美
 青鬼
 巷巴
 松雨
 憤兒
 流之助
 靜太
 憤兒
 鮎美

席題半身卜

半身を水にぬらしてすきな釣り
半身を見せて女の春の窓
彫刻の半身だけへ灯がはいり
半身をのりだしてゐる若さなり

鵜 憤 一 鰯
峰 兒 馬 美

— (69) —

兼題 全 快

鹿の子選

法泉子選

女の子

楠六郎選、約東、墓秋選、支店研

一路選、寄附(五分間吟)互選

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

櫛

飯事へ家風をみせて女の子

寄附金へ眞面目になつてき合はす

寄附金で建つ講堂の廣きなる

ちよこまと仔豚仔豚らナンセンス

支店長事務に見舞きた顔である

グッションへ重みを見せて支店長

行樂の春非常時もうらゝけく

いたづらの笑ひも純な女の子

淡き戀なり啞の娘のこもりぬ

寄附をして宮へ大きく名がありが

お隣りもこの通りです寄附は言ひ

約束の時刻も知らぬ酒の味

まだ若くスキーを語る支店長

約束の朝へこんなに雪が降り

支店での胸重役に見込まれる

非常線犬を叱つてつゝがなし

天痴人居偶會 (松江)

席題 風、梅互選、最後、五圓札

(五分間吟)

風上げの友へ我が子は病んでゐる

窮屈な財布五圓紙幣の皺

風、風、そんな時もあつたつけ

之が最後ですと醫者は手を拭きて

あの便り最後となつて戦死なり

五圓札持つてカフエー呑み廻り

退院を祝ふかのごとく梅が咲き

好い氣嫌親爺も風を上げける

十銭ストアへ五圓札の迷つてゐる

風強く風運命の綱が切れ

出張費五圓で少し不足あり

五圓札あつさり出せて感謝金

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

同 秋

五圓札あるを悪友知つてをり

梅なごをほめる暇なく雪を掻く

風糸の向ふに陽炎もえてゐる

もう最後無電を叩く難破船

最後まで戦ひきれぬ女なる

簾入りの女中にて嬉し五圓札

麗人のショールに白き梅は咲き

電線を真下風にのれしいぞ

内拂ひしよゝゝ乍ら五圓札

御祝儀に皺を伸した五圓札

梅林で舞妓の聲が甲高い

冬が未練にひそんでる梅の蕾

風揚げの子の空想へ空蒼し

遺書も無き最後地圖にもなき

最後の酒だ舌がもつれてゐる

五圓札女給のエロの安價なる

廓の春を追ふ五圓札二枚

絶叫の最後は風が持つて逃げ

最後にも賞品やると走りされ

風の子を嬉しうして一錢風を上げ

小作の子二人して一錢風を上げ

席題 南 國

南國の乙女ためらひもなき

搾取なき南の國の春を追ひ

南國へギター奏でる淡き春

南國の夢まごかなる椰子の影

南國の椰子の葉陰に戀を知り

君知るや南の國の戀の友

早熟な春南國のデカメロン

南國へ若き燕と行き給ひ

席題 女流作家

久方墓秋選

六郎

六郎

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

同 法泉子

才筆へ女流作家の餘念なし 祥月
 半分は美貌で賣れる文を書き 法泉子
 芳名簿女流作家は細く書き 卷二
 作品と別に女流作家生き 六郎
 (三客子も無く女流作家の豊頼) 卷二
 (同)理智がとんが女流作家の鼻に 天痴人
 (同)アバートの吐息を女流作家が行く 同
 (人)女流作家眠る女軍の尖端を行く 青波
 (地)ヒナリツクな爆弾女流作家のペン 天痴人
 (天)女といふ恥らひ捨てテプロ作家 六郎
 席題 黙殺 田久和法泉子選
 黙殺へ自由奪はれたる如し 墓秋
 黙殺もマダム媚態の一つなる 天痴人
 黙殺の襖さちんとたゝねなり 卷二
 黙殺の尖る心も若き身の 墓秋
 黙殺を砂かむ様に味ひし 舍行
 黙殺の胸細鐵となりきつて 天痴人
 黙殺のほろ苦き身となる微笑 墓秋
 黙殺の時計の音と雨の音 卷二
 席題 コンクリート 廣江天痴人選
 叩け響くコンクリートの意志 法泉子
 コンクリート石を壓した時代相 青波
 コンクリートの冷たさが労働者の悲哀 舍行
 秋さ中コンクリートに陽のぶく 墓秋
 街路樹にコンクリートがよく映り 青波
 新開地コンクリートがつくくなり 卷二
 捲られるうめを断るコンクリート 六郎
 労働者 コンクリートの渦 舍行
 (客)コンクリートの闊志で突撃ぞ 法泉子
 (同)資本家とコンクリートは冷た 卷二
 (同)コンクリの家へヤングが入る 岩帆

(同)憂鬱はコンクリートの色とな 卷二
 (同)塗がコンクリートへマリの跡 祥月
 (同)慈雨としコンクリートへ弾ける 墓秋
 (人)コンクリートへつて春雨が悲鳴を 六郎
 (地)コンクリート叩けば春の音が 同
 (天)臘月コンクリートにほつと 卷二
 かほる居偶會 一月廿八日
 朝の陽にさらけた虚偽の墨の色 鮎美
 墨恨のあざやか父と子と座り 同
 墨すれば妓のかほが笑つて 同
 言譯を考へながら墨をすり 遊歩
 級長の持つてる墨を買うて見る 同
 もう一度頼んで見る氣墨をすり 同
 辛氣くさそうな顔して墨を賣り 同
 墨すつて墨置く音を妻は聞き 同
 一月二日 於村小學校 鴉 天報
 「カラス」も二歳になりまして、大分生長
 して参りました。三三年最初の句會を村の小
 學校で開きました。大地吟社から、綠、羅、
 田三兄の御來會は感激の至りです。感謝の意
 を表します。
 兼題 烏 鴉 天選
 烏々啼いて呉れるな母は病み 汀雨
 三羽烏と唱はれし彼氏今は亡き 同
 不吉なる豫感を秘めて烏啼き 同
 初日の出東の山に烏飛び 親光
 夕焼の烏金色の鳩と化し 一可
 烏啼き馬鹿にはならぬ凶があり 同
 烏啼き噂の種がまざれ込み 加僧惡

行き暮れた御寺の森に啼く烏 田鶴緒
 啼き暮れし森の子烏雨の一日 同
 黒き日のするごき烏啼き續け 羅門
 (佳)烏啼き他郷の子等が氣付か 無路通
 (同)書齋へにくらし程烏啼き 水煙
 (佳)牧場のボプラに哀一羽。暮鳥 田鶴緒
 (同)烏の羽根が光りぬ初日の出 羅門
 (同)枯枝に啼かぬ烏も東風となる 同
 (同)烏も嬉しそふ元旦は森へ去 同
 (人)あきれた顔で烏の剛情を追ふ 同
 (同)君死んである空烏が啼いて 同
 (同)出て行かぬ今日も不吉な烏啼き 羅門
 (地)凶感の頭の上に烏啼き 綠之助
 (同)銃音に烏同志の狼狽を憐 綠之助
 (天)つまらない日暮烏を聞いて 綠之助
 (軸)死んだ報に烏啼き話し合ひ 同
 (同)初日の出引出す様に烏群れ 同
 兼題 門松 羅門選
 一人者淋しく門松立てゝゝある 無路通
 門松にこけたまでは知つてゐる 水煙
 門松へ自家用華美にすべり込み 鶴天
 門松をくぐり禮者の顔になり 同
 門松を千鳥足で歸る父 田鶴緒
 門松へ立ち九十歳を寫される 同
 (佳)門松にのつた羽子を縁と 綠之助
 (同)門松の所で景氣の好い話 水煙
 (同)生酔に衝突もよき門松の 綠之助
 (同)門松を小さく立てゝ愛の巢 同
 (人)門松を避けて追羽根上手なり 同
 (地)お妾の家も門松立てゝゝある 田鶴緒
 (天)春や春門松から明け来り 綠之助

(軸) 門松が一系列を磨きけり
 兼題 決心を浮べて飯の味
 決心の色を浮べて飯の味
 決心の誓を固く墓で言ひ
 決心を神に誓つて屠蘇に祝ひ
 必勝の決心のあるいゝタイム
 決心はして見たものゝまだ泣ける
 決心をにぶらせてある父母のしわ
 決心に父はしるゝ旅費を出し
 決心の力の場面悲劇にみ
 決心を秘めて後汽車の人となり
 決心が此幸福をもたらした
 決心をして朗かな朝であり
 決心をして落着いた顔になり
 思ひ切る氣も出ずと子の寝顔
 決心の鈍さを笑つてゐる妖婦
 悲しき覺悟のするごき晝ぞ
 決心のさて町角が尖つてゐる
 (佳) 決心に父の白髪のみ悲し
 (同) 決心のその夜の簪が持つ重み
 (同) 決心の荷物へ悲しき夜迫る
 (同) 決心の顔へ友等の目を伏せる
 (同) 決心の手の平冷たき夜の涙
 (同) 決心が着いた筆太書いて来る
 (人) 決心の顔へ破たる蜘蛛の巣
 (地) 決心の付いた男窓の雨
 (天) 徒らに日記よごした決心や
 (軸) 來は來淋と決意アスフアルト
 席題 母 校 田 鶴 緒 選
 立身し母校の名前も大きく出
 出せば母校へ寫眞掲げてゐる

晴姿母校の子等の迎へ受け
 母校の記念樹懐し空をつき
 春が春が母校の櫻思ひ出させ
 記念樹は其のまゝ母校建直り
 貧弱いされどやつばり母校なり
 よろきき母校に消ゆる歌
 母校昔ながらの小使さん
 (佳) 母校の庭の童心がいつちいゝ
 (同) 母校へ來る寄附でもしたい
 (人) 今更の様に母校が懐しく
 (同) 母校思へば應援歌に聲吸るゝ
 (地) 一人母校に悔なき日曜日
 (同) 母校とはボブラの風の思出
 (天) 名をなして母校へ手紙書く
 (軸) 國訛り課長も同じ母校なり
 (同) 記念樹の重りゝ母校の懐き
 席題 明 朗 羅 門 選
 明朗な答社長の氣に叶ひ
 明朗な話にバツトへつて行き
 歸郷した友は明朗に話し出し
 明朗な朝だスパイクに在る自信
 (佳) 明朗の空口笛を吹き出した
 (同) 拾八の鬚に明るい春の部屋
 (同) 來日去日少女の生命の明朗
 (人) 口笛口笛明朗な空と海
 (地) 青空見よチャールストンの足
 (天) 理知が笑はせる悔もなき破戀
 (軸) 青空と對す暉が輝ける
 席題 トラツク 勇 綠 之 助 選
 初荷のトラツク勇し陽をのせて

トラツクが御免々々と通り抜く
 ロケーション美人もトラツクに乗つて
 満載のトラツク交番で付けられる
 歳末の巷トラツクに揺られて見
 トラツク(初荷の景氣よく
 喘ぎ)トラツク師走の町を行き
 初雪も積んでトラツク町へ出る
 ぬかるみへ初荷のトラツク威勢とし
 (佳) 引越のトラツクにはちと足
 (同) 師走の町トラツク人をしき
 (同) 積めるだけ積みトラツク揺り出し
 (同) ぬかるみへ満載のトラツク揺り出し
 (同) 雑音を切りトラツクヒルデザイン
 (人) 自家用へ叫も迫るトラツクや
 (地) 資本主義のトラツクアスフアル
 (天) 空のトラツク北風が追つか
 (軸) トラツクに我日本の勞働者
 (同) 國道を行くトラツクに春の風
 栗炊居雜吟集 (岡山)
 第三回 森本素木 報
 お歸りへかくれてもみる新世帯
 はてどこか見えて娘とすれめい
 意納の村に國旗のひらめい
 太陽へ兩手ひろげて居る畫面
 靈的に生きんとすれば冷やかされ
 土臭きなつて里子とすこやかさ
 横にれて屁理屈を云ふ子に困り
 慣はるおれの若さへ妻が泣く
 第一に見 見 田 夕 鐘 報
 第一にエロから話す視察談 水 車

—(73)—

(同)上海の血を持って飾る豪華版
まさを

席題 笛 人 選

笛の音が淋し雪雨の夜が更ける
踏人

口笛で勇しそうに行軍歌
祥月

笛吹けばいつか濱邊に來てゐるなり
踏人

大望の男と見えす笛を吹き
巷人

郷愁の夜を窓邊に笛を吹く
柳人

口笛は未來を語る紺緋
巷人

警笛へ神經質のちうちよする
柳人

口笛にさびしき雁の列するなり
まさを

病上り明笛を吹く氣にもなる
祥月

(秀)君戀し口笛となる月が出る
柳人

(同)責任を終へて氣安な口笛よ
同

(同)丸窓に流るる笛の音律よ
同

(同)笛吹空にはまいるいまるい月
まさを

(同)草笛に淋しい雲がびた走る
巷人

席題 二 心 人 選

二心少し會費の高すぎる
踏人

二心マナーの高で決められる
踏人

二心やつぱりエロにするに決め
哲緒

二心有つて彼女は美人なり
同

洋装が氣に入ららしい二心
玲人

鎗矢は一つ二つの愛慾よ
まさを

二心のテールで落ちつけず
柳人

席題 驚 哲 緒 人 選

驚の初音に緋の手を休め
玲人

驚よ啼くホムシツクな男なり
巷人

驚を飼つて獨身氣が紛れ
祥月

驚が啼くばかりなりランデー
巷人

(佳)驚が啼く丘にも春の色
同

(同)驚へまろさ心のペンを置く
まさを

(同)驚張りこゝにも春の團体旗
巷人

席題 春の雪 祥月、踏人、共選

春の雪落けてあまふ二人連れ
玲人

晝間電灯に淡雪が溶けてゆく
まさを

淡雪に庭木は春の息づかひ
同

相傘にちらりと降る春の雪
祥月

子の喜ぶ間に消える春の雪
祥月

(秀)情熱は燃える音無き春の雪
柳人

(同)綻びを繕う母に春の雪
まさを

(同)春の雪睫毛の先に消ゆるなり
玲人

カラス吟社例會 (鳥根)

一月十四日夜 於 鶴天居 江雨 報

題 社會、世間、義理、年増、風邪 天 選

年増とは思はれもせぬ澄んだ聲
の馬

前科者世間をせまく飛び歩き
一可

無理な事知り聞ける義理の母
無路通

若返りの本も見てある大年増
汀雨

愛人は咳一つにも心配し
同

ありつたけの力で義理を立て続け
水煙

風邪ひいて長い廊下へ待ちあぐみ
同

一文もなく世間の面白し
同

食ふだけは持つて義理の固い事
同

義理の進物眞四ツ角來る
同

いかだ會小集 (松江)

一月二十九日夜 於 祥月居 岡崎祥月報

席題 滿洲 柳人 選

(佳)渡滿兵靴磨く手に力あり
三郎

(秀)滿洲へ住めば儲かる計を立て
祥月

(軸)大陸は凍る焼酒胸を焼く
柳人

席題 姿見 見 祥月 選

(佳)姿見の初桃割に見とれて居
句人

(同)姿見の素直に泣いた顔を見せ
柳人

(同)姿見もうれし朝を微笑めり
同

(人)姿見へやつた頬をなでる見る
柳人

(地)姿見へ胸の思ひを打ち開ける
同

(天)姿見へマダム情痴な笑ひする
同

(軸)姿見へ少しひま取る薄化粧
人選

席題 人 氣 柳 人 選

松内の聲に全國耳を立て
勝人

ブラットの人氣女優へ人の波
祥月

夕餉の集ひ坊やは人氣者
句人

席題 吹雪、寒行 互 選

寒行の前を懷手で通つて來
句人

寒修行吹雪の中に聲を張り
祥月

寒修行ラサカの時報聞かされる
柳人

川柳風呂 (大阪)

水谷鮎美報

泥酔の友をかついだ終電車
坊茄子

街の灯がひよろ／＼逃るに酔ひ
同

泥酔の影も至んで街の月
同

泥酔の眼におもしろきくだもの屋
同

毒草に宿かりて露ひかるなり
同

毒草のやさしく伸びた立姿
同

麗人の眼に毒草の氣味わるく
同

毒草へ孝女の鎌がひかるなり
同

毒草をむしる妖婦の影重し
同

朝歸へりまぶしき妻の笑顔なり
坊茄子

朝歸り夕べのたばこおれてゐる 鮎美

相談

相談へ父は入齒をはづしてゐる
相談の相手に母は弱すぎる
相談ができた外へ送り出し
相談の窓をあければ春の風
風呂歸りその相談をまとめたり 鮎美

光頭會創立句會

須崎 豆 秋 報

二月十日ガナメ喫茶店で 光頭會創立句會
が催された。燦然として集まつたもの 禿山
綠雨、白柳子、里十九、豆秋、オアザパー
の格で紳樂、杏三兩氏も見へ、光頭川柳家カ
ンパレドで光頭漫談爆笑裡に句を作り實
に明るい朗らかな會でした。本會は光頭家共
通の樂天性を大いに發揮して川柳界へ期ら
かなサーチライトを投げかけんとするもの
で柳界にもこうした膽のやうな存在がたま
に一つ位あつてもいいと思ひます。猶當句會
は毎月開きますが兼題は永久に「禿」です。
光頭柳人諸士の御入會を歓迎いたします。

兼題 禿

綠雨 選

惚れたれた昔もあつて禿げてゐる 櫻果
若禿の成るほど無邪氣に笑ふなり 三汀
禿け頭つるりと撫で、倍てと言ひ 禿山
若禿と言はれて金を貯めてゐる 白柳子
禿げてゐるテツペンがタカナルで下し 艸樂
若禿を公にしてよい氣嫌 里十九
禿げてゐる方はるかにもてゐる 同
お互に禿げて來たのをおかしがり 豆秋

禿げ工合にだけは金持らしく見え 同
五

選

(佳) 吊皮が帽子にはせてゐる切符 玲人
(同) 吊皮に人妻の袷句ふなり 正雄
(同) 吊皮が悲鳴をあげた急停車 玲人
(同) 餘奮まりに覺めず吊皮強く揺れ 卷二

相乗りに向ふの山は霞んでお 病院へ送る間を相乗りとし

杏三

相乗りの膝に串柿幅をとり 相乗りに始めてと言ふ町を行く

相乗りの男眼鏡をかけてゐる 相乗りへ石でも投げてこまそうか

綠兩

相乗りの幌へ小雪がとんでくる 相乗りがそろ／＼と行く繪看板

相乗りは橋へかゝつた音になり 同

同

出世して故郷の驛を狭く降り 兵隊が立つ立つ雨の松江驛

同

同

驛員の瞳に樂しげな客ばかり 驛近く住んで汽笛の音に飽き

同

同

哀別の歩廊にしと冬の雨 驛前に並んだ車庫へ暮れかゝり

同

同

ストーブは一つお客に足らぬ 工面してこれっぽつしの愛情か

同

同

愛情へ初心な娘の怖じてゐる 愛情は兎も角金があるのなり

同

同

愚痴つばい愛情となり東ね髪 (佳) 愛情は熱し白い息となり

同

同

(同) 愛情の一つネクタイ編んで (同) 愛情は背中合はせにつんとす

同

同

三人寄りて 吉田 晩 春 報

辨當へ虫歯が痛むふたを取り 就職へうれしい辨當持つて出る

同

更生の辨當箱を抱へて出 マツチの火彼の女がふつと消え

同

同

マツチまたわすれた日の巻たばこ 白 晩 春 菊

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

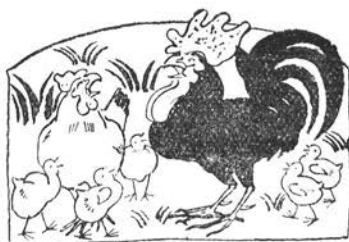
同

同

同

同

同



編輯の窓 二 記

▼何よりも先づ本號の遅刊をお詫びします。編輯上の組織一部變更などのため、延刊今日に及び、讀者諸氏に御迷惑をかけ申譯ありません。その上逸早く色々なデマが飛んだりして、御問合せの書面等に接しましたが、決して御心配は御無用に願ひます。四月號は矢繼早に發行して今度の埋合せをいたします。

▼その代りに——と云つてはなかしいが、内容は御覽の通り十分に豊富です。「武玉川初篇研

究」「三笠附に據る流人」「千日前今昔史」「腋枕草紙」等の連載物の外、笠原路生氏の「川柳の翻譯に就て」があります。氏は阪大醫學部小兒科醫長。その豊富な研究の一端に傾聴された。太田隆彦氏の「僕のれこソロ」は好箇の微笑ましい通信文月評は琴人、杏三、二南の頗觸共に御愛讀を願ひます。

▼各地柳壇最近の充實振は、急激の膨脹を來たし、甚しく誌面の狹隘を感じ、増頁も追つたくなりまして、次號あたりから發表方法に多少の改革を加へることになるかも知れません。

▼光緒抄は女性作家の少いわが柳壇に、獨自の存在として、每號異彩を放つてゐるので、掲載の誌面も前號通りの体裁で豫定してゐましたが、校正に至つて

他の原稿の組み方を急遽變更のやむなきに至り、時日の切迫に追はれたため、それが光緒抄の組みにも影響して遂に御覽の通り片隅へ片付けたやうな工合になりましたが、次號から氣をつけますから、奮つて佳吟を寄せられんことを期待いたします。

▼各方面の權威ある方々から續々御寄稿を得て、毎號誌上を飾ることが出來て、皆喜んでゐます。よい原稿は有名無名を問はず掲載いたしますから、研究なり評論なり又は隨筆漫文何にても御寄稿を願ひます。今月も誌面の都合で、次號廻しにした原稿が多かつたが、それは次のお楽しみとして、筆者並に讀者諸氏にお諒承を願つておきます。

▼短歌などの雑誌をみると、大家達が第一線に立つて歌壇當面の問題について、堂々の論陣を

張つてゐて、如何にも緊張激瀾としてゐるやうに思ひます。中堅や新進の人々にしても決して眠つてはゐないやうです。柳壇でも敵味方といった感情の問題などは捨て、他社の人々とは勿論、同じ社の人々も、もつと意見の交換をやつて、お互に啓發されたいものと思ひます。

▼路郎主幹も、小さな雜務から開放されて、次號あたりから飛躍的に大いに論じ、大いに歌はうといふ意氣を示してゐられますから、本誌の精彩、更に輝きをますことゝ信じます。

▼時は今、水溫み木の芽ふくらむ早春、私達の身心にも、新しい熱情が目ざめ、川柳詩への癡視と、研進と、創作慾とに、鞭を加へて呉れるではありませんか。古句研究に、新しい川柳の制作に、猛進いたませう。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼光耀抄は女性作家に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清配の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなる（く楷書「川柳雜誌原稿」）と封筒に未記する事。
- ▼締切は嚴守された。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第五號課題

三月五日締切

(各題十句以内)

- ▼座席祭 高橋かほる選
- ▼旅 長崎柳秀選
- ▼寶物 吉田水車共選
廣江天痴人選

第十卷第六號課題

四月五日締切

(各題十句以内)

- ▼突然 前田五健選
- ▼眼鏡 福田山雨樓選
- ▼愁ひ 阿部閑生選

每號募集

- ▼近作柳樽(舊吟) 麻生路郎選
- ▼光耀抄(雜吟) 麻生霞乃選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

計務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

- 一 部 金 拾 銭
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾銭
- 壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾銭
- (半々年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に願ひます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諸代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十銭を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年 二月廿五日印刷
昭和八年 三月 一日發行

第十卷第三號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 柳生 幸二 郎
發行所 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 柳生 幸二 郎
電話大阪三五一四番
電話天下茶屋二五七九番
電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番

賣捌書店
(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
(東京仲見世) 森堂(神戶) 米田、寶文館(函館) 石塚
(京都) 三宅 (松山) 弘文舍 (石川縣) 小松ばかりや

川柳雜誌社關係の人々

—(79)—

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなった。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く読む方法として古本を買へばいい、古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は違ふの昔に過ぎました。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速参上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大坂市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

加茂川句會

日時 三月廿二日(水)午後六時半
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題「彼岸」三句 司 郎 選
會費 金 參 拾 錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京 都 支 部

綠雨居偶會

(日時) 三月廿日夜
(所) 大坂市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

螢ヶ池支部句會

(日時) 三月十二日午後一時
(所) 大坂阪急沿線刀根山病院內 幹事 龜井 愚龍

今般左記へ移轉致しました倍舊の御風交をお願い致します
大坂府中河内郡加美村字
鞍作
奥 田 蛙 柳
奥 田 柳 甫

風俗研究誌

麻尼亞(一部二十錢)
滋賀縣甲賀郡寺庄村寺庄
發行所 平 井 蒼 太

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願いします
大坂市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

道ブラから天牛へ

書籍 天牛本店

大坂市南區日本橋南詰東入
南側(電話南二七四九番)

懸賞川柳募集
題「花」 三月十日締切
路郎 選
その他雅吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟
大坂市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

川柳雜誌投句用箋

▼本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴三冊 價金拾一錢(送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

川柳手拭 路郎主幹
の染筆 二種 金三拾錢(送料共)

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁ミはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父ミなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月三日第三種郵便認可(毎月一圓一日發行)
昭和八年二月廿五日印刷
昭和八年三月一日發行

川柳雜誌 (第一一〇號)

定價金三十拾錢

保險 「保險」 回本生命

大坂市東區今橋四丁目